日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２４第８５９回

日本が大転換する日－どうする？

パンデミック条約・亡国憲法改正・亡国岸田内閣

R6/5/28

パネリスト：

及川幸久（作家）

岡真樹子（愛国女性のつどい花時計 代表）

折本龍則（千葉県議会議員）

近藤倫子（著述家・児童家庭支援士・公益財団法人 日本国防協会普及委員）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

山中泉（著述家・一般社団法人 IFA（International Freedom Alliance)代表理事）

司会：水島総

＊＊＊＊＊＊

水島「皆さん、こんばんは」

一同「(礼)」

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２４第８５９回目の討論となります。今日は、ずっと一連の流れですけれども、日本と世界が大転換を迎えようとしている。そういう中で『日本が大転換する日－どうするパンデミック条約・亡国憲法改正・亡国岸田内閣』をどうするんだといった、少しバラつきがあるんですけど、実際は全部、繋がっているんですけども、こういった問題について忌憚の無い御意見を聞きたいと思う訳であります。

皆さん、ご存じのように、６月２０日、都知事選が行われます。立憲民主党から蓮舫さんが出るとか、小池都知事も三選を目指すとか、また、こういう言い方をすると失礼ですけど、お名前、ちょっとあれなんで何処かの地方の市長さんが東京に来て立ち上がるとか、色んな形の人達が大勢、立候補するそうであります。

こういう都知事選が６月２０日から７月７日の投票日という日程に合わせて、実は岸田内閣、岸田さんは、会期延長してから、まだ一発逆転の総選挙をやろうかなんていうね、普通に色々と考えれば絶対に無理だって言うんだけども、この間、静岡県知事選が負けても未だやるという背景に、やっぱり彼を支えている強い力があるから、こういうものがあるんでしょうけども、こういう状態であります。

そういう中で今迄のマスメディアとか、そういうところが中々言えない状態になっています。ここは YouTube なので、一種のコロナ関係については大変、煩い。それと、私が映画で２作、創りました南京関連の問題について言いますと、直ぐに削除、バンされて２週間、ストップ。

そして、もう一回、やると、２０年のコンテンツが全て抹殺される。消されてしまうという恐ろしい脅迫の中でも負けずに色々頑張っていますけれども、そういう意味で言論の自由っていうのは今、本当に苦しくなっていますけど、それでも我々は、出来るだけ自由な発言、独立した発言をしていきたいと思っています。

少なくとも、この YouTube や、こういう中では、もっとも自由な発言が許される場にしていきたいと、それを目指して戦うつもりであります。ということで、皆さん、是非、その辺のところを宜しくお願いします。結構、喧嘩は難しいですね。向こうが全て持っていますからね（失笑)、ということであります。

では、御出席の皆さんをご紹介します。まず、愛国女性のつどい花時計代表の岡真樹子さんです。宜しくお願いします」

岡「宜しくお願いします」

水島「著述家で一般社団法人ＩＦＡ（International Freedom Alliance）代表理事の山中泉さんです。宜しくお願いします」

山中「宜しくお願いします」

水島「作家で会社ＣＥＯ、Ｘ動画配信者、及川幸久さんです。宜しくお願いします」

及川「はい。宜しくお願いします」

水島「著述家で児童家庭支援士、この公財っていうのは財団、公財でいいんですか」

近藤「公益財団法人です」

水島「はい。公益財団法人日本国防協会普及委員、近藤倫子さんです。宜しくお願いします」

近藤「はい。宜しくお願い致します」

水島「歴史学者、麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします」

水島「そして千葉県、県議会議員の折本龍則さんです。宜しくお願いします」

折本「はい。宜しくお願いします」

水島「今日は本当にズバズバと自由に発言している皆さんに集まって戴きまして、この問題について話し合ってみたいと思います。まず、今の日本、世界もそうですけど、皆さんは今、どんな感じで見ているか、今日の時点、５月末の時点でどうなのか伺いたいと思います。岡さんから、一言ずつ、どうぞ」

岡「今の日本についてでもいいですか」

水島「はい。いいですよ」

岡「私は岸田政権になって以来、ずっと岸田首相の批判ばっかりして来たんですよね」

水島「そうですね。いっぱい、していますね」

岡「えぇ。やっぱり間違っていなかったなって思っているんですよ。歴代の自民党の首相の中で最もあり得ない人だと思うんですよ」

水島「うん」

岡「うん、あんな人はあり得ないと思います。勿論、皆さん、個々の政策については色々、御批判もあるんでしょうけれども、やっぱり人間として、ここまで非常識なのかなって言うか、能登の震災の時も被災地に対して全く関心が無いんですよね」

水島「そうですね」

岡「復興に対して全く関心が無いですよねぇ。それから、あそこの馳浩（はせひろし）っていう知事ね。知事も自分の石川の復興に対して全く関心が無いんですよね。だから被災地が打ち捨てられている訳ですよね。もう３か月ぐらい経つのに、建物も全て壊れたままなんですよ」

水島「そうなんですよ」

岡「勿論、道路もそんな状態なので重機とかが通れない訳ですよ」

水島「はい」

岡「それで仮設住宅は、ようやく建ってはきたけれども、しかし物凄く遅いんですよね」

水島「そうですね」

岡「今迄の過去の震災に比べても凄く対応が遅くて、自民党でもこんな程度の対応かと思うと、全く行政の機能していない状態。これは一体、どういうことなのかって、本来、日本っていうのは、過去に沢山の災害があるじゃないですか。どんな災害があっても日本っていうのは災害慣れしているじゃないですか」

水島「はい」

岡「だから地方自治体もそれなりに、その準備がちゃんと出来ているはずなのに全く出来ていない訳ですよ。だから皆さん、これは一体、何処の発展途上国なのかと思うような状況じゃないですか」

水島「はい」

岡「震災関連死は、もう１００人ぐらい、いらっしゃるんですよね。だから震災で死んでいなくても、そのあとの行政の対応が悪いから亡くなっている訳ですよ。だから日本っていう国が本当に根底から劣化しているなって、もう正月早々、私は凄く怒っています」

水島「そうですね」

岡「えぇ」

水島「今、岡さんが言ってくれたように、我々も、この間、二度ほどね、仲間が車で取材に行きましたけど、本当に酷いですね。我々は東日本の時に、１７回、現地に行きました。皆さんから７千数百万円をお寄せ戴いたので、それを被災地と相談しながら最初は水や食料、そのあとも色んな形で１７回、やって来ましたけど、こんなに遅いことは無いですよ。だから、我々が今、思っているのは、やるつもりがない」

岡「うん」

水島「つまり、もう、あそこは放り出すと」

岡「うん」

水島「人民は賑やかな所へ集まってくれと。そういうような棄民政策をやっているって言うか地方の切り捨てをやっているっていうことが言えるんじゃないかと思います。ちなみに、未だ数字は色々ありますけど、７千から９千人の方々が真面に自分の居た所に戻れないで、未だ避難所で暮らしているそうであります。有難うございます。では山中さん、お願いします」

山中「はい。私はアメリカに１９８０年、４４年ぐらい前から長く居たので、アメリカの中で、ずっと見てきました。大統領はレーガンの時からだったんですが、それから、ブッシュ親子、そしてクリントン、オバマ、トランプを見てきまして、１９８０年の初めの頃っていうのは、アメリカは、その前のカーターで金融や何かは物凄いバァ～ンって上がって、確かに非常に高い金利でアメリカ人が物凄く苦しんだっていう背景があるんですが。

そして、あの当時、１９８０年以前は、日本人は元気があったと思うんですよ。日本企業も、もっと元気があったし、トヨタとか日本のメーカーはアメリカの市場を物凄い勢いで

奪っていった。それは日本の会社の力、或いは日本人の気概と言うか、日本人の気力が未だ高かったような気がするんですね。

それが、ここ、二十数年、私は年に何回も行き来が多いものですから、帰るたびにおかしいなぁ、おかしいなぁって、どんどん日本が変わっていった。まずアメリカが、おかしくなったっていうことで、この『アメリカと共に沈む日本』というのを書きましてね（苦笑）、そのひとつが『アメリカの崩壊』という本で、三冊、出しているんですが、もう一つが『アメリカの終わり』っていうんです。

私が四十何年前から知っているアメリカというものの伝統的な価値観は彼らなりのものがあって、それが、どんどん崩されていく、その大きなものは、やっぱりグローバリズムですよね。そして、この流れが恐ろしいことに日本にまで、もう完全に来てしまって、そして、今、岡さんが言われた岸田さんっていう人が象徴的で、あの人は言われるままに既に物凄い金額をウクライナに、はいって出している。

しかし、何のことは無い、能登っていう日本でも一番、大きな災害を受けた所へは何もやっていない。今の自民党岸田政権は、それこそ日本ラストですよね」

水島「うん」

山中「実は、こうしているようにアメリカのバイデン政権も、実はアメリカ・ラストの政権ですよ」

水島「うんうん」

山中「反アメリカってことを、僕は、その三冊の本で書いていて、彼が２０２０年、何か、ムニャムニャ～と、おかしなことが起きてバイデン・ジャンプってやつが起きちゃってね、あれっていう間に史上最高の得票なんて考えられないぐらいの票が集まっちゃったんだけど、それで大統領になりましたけれどもね、そして、結局のところ、その結果、何が起きたかと言うと、初日、あの１７本の大統領令っていう中のいくつもが、あの中で、まずガスのパイプラインを止めるというやつ。

それから、もう一つは移民関連でジャンジャン入れるっていうのを何本も出しているんですね。だから、これによって、あの二つは、つまり世界のガソリン価格はバァ～ンっと、エネルギー価格を上げるというのに、あのアメリカがそれまで世界最大レベルで供給できる国が全く止まっちゃった訳ですから、外に買いに行かなきゃいけなくなったことで一気に価格が上がってしまった。ロシア・ウクライナ戦争じゃないんですよね」

水島「うん」

山中「だけど、そういったことから来て、やはり今は移民。１２００万人とも言われる、これでアメリカの治安だけじゃない、アメリカの生活、命そのものも完全に奪う体験まで来て、実は、今、そのまま後追いしているのが日本の今の姿で、アメリカで起きていることが、そのまま、昔は１０年２０年経って起きるっていうことが、今、あっと言う間に日本に来て、どんどん日本が壊されていっている。そんな感じが私は非常に危惧していまして。今日はね、本当に皆さんの分野の専門家の方々のお話を聞きたいなぁという風に思っております」

水島「そうですね。今、丁度、アメリカと関連付けて戴いたけど、これも我々の討論の中

でも、ずぅっと問題になっているお話でね、そこは是非、また、お話を詳しく聞きたいと思います。日本自体が解体されていく。それでアメリカ自体が、さっき言ったように古き良きっていうイメージを持っていたアメリカとは違うものを、だからアメリカ自体が解体されようとしている」

山中「（頷く）」

水島「日本もそうだっていうねぇ。それで、もっと言えば、伝統や日本人の心といったものも解体されて、移民政策って単に他民族と共生するんじゃないんですよね。そっちの意味で、今、おっしゃってくれたと思うんですけど、ここは凄く大事な話だという気がします。有難うございます。では、及川さん、お願いします」

及川「はい。今日のテーマが『日本が大転換する日』ということですけど、今のところ、あまり大転換をするような兆しが無いというように、私は感じるんですが、ただ世界は大転換するのではないかという兆候があると感じています。それは、やはり、今週、世界中が注目している世界保健機構、ＷＨＯ」

水島「はい」

及川「この年次総会。ＷＨＡって言うんですけど、これが昨日の月曜日から今週の土曜日、６月１日まで行われているんですよね。今、これがどうなっているかっていうのは、ちょっと予想外の展開になっていまして、さっき、山中さんが言われたグローバリズムという、正にＷＨＯって、もうグローバリズムの巣窟だとみられるところですよ」

水島「うん」

及川「正に、そのＷＨＯを通してグローバリズムをやりたい放題やっていた人達が今、にっちもさっちもいかなくなって苦渋の表情を浮かべているのが現在ですね」

水島「うん」

及川「これはねぇ、ちょっと予想されなかったですね」

水島「うん」

及川「問題は中々、はっきり言えないあのパンデミックに関する国際条約。これが過去２年半もかけて討議をしてきて今週までに草案が纏まって、今週、行われる総会で最終的に決まって各国に持ち帰って各国が批准して、これで決まるんだという手筈だった訳ですよ」

水島「そうでしたね」

及川「ところが結局、先週の金曜日までギリギリまで草案が決まらなくて、この議論を延長に次ぐ延長をやってきた訳ですね。それでも結局、決まらなかった。ここでＷＨＯの事務局長のテドロスさんは一応、悲観的なことを…」

水島「はい（似顔絵を出す）」

及川「あ、あっ（笑）」

一同「（笑）」

及川「テドロス事務局長」

近藤「よく似ていると思う（笑）」

及川「凄く似ていますね（笑）」

一同「（笑）」

及川「この方が非常に悲観的なコメントを出されて」

一同「（笑）」

及川「あれ、よく似ています（笑）。操っているのが、こっちのビル・ゲイツの方ですね。何かネットなんかでは、これでパンデミック条約が無くなったのかっていう楽観論が広がりつつあるんですけど、いや、未だ分からない」

水島「そうですね」

及川「分からないんですが、決して廃案になった訳じゃないです。一応、当初の予定の今週、この総会で決めるっていうのが難しくなったということで、じゃあ、どうなるのかっていうのが、これからの展開次第ですよね」

水島「うん」

及川「ＷＨＯは諦めてないと、私は思います」

水島「うん」

及川「あくまでも、これを何としてでも強硬に採決するつもりだと思うんですね。で、ただ、このパンデミック条約というものの未来は暗いです」

水島「うん」

及川「えぇ、とっても暗い（失笑）。それが明らかになっていてグローバリストの皆さんは、困っているんですね。まず、その暗い第一は、反対する国が物凄く多かったということですね」

水島「うん」

及川「主に反対しているのが途上国です」

水島「うん」

及川「多分、提案した側は予想してなかった反対が途上国から、いっぱい出て来てしまった。主に反対しているのがアフリカ諸国です。アフリカ諸国は団結しているんですよね。アフリカ連合みたいなのを創って団結して反対しているんです。反対じゃなくて基本賛成ですけど、もっと寄こせって要求をしているんです。それに困っているんですね。ちょっと詳しくは置きますけど、それから物凄く反対しているのがインドです」

水島「うん」

及川「やはりインドが、ここに来て存在感を表していまして、インドが言うことを聞かない」

水島「うん」

及川「これが一つ、あります」

水島「うん」

及川「これはインドにしてもアフリカにしても、何を表しているかって言うと、グローバルサウスですよね」

水島「うん」

及川「結局、ここのところに来て、ＢＲＩＣＳだとかグローバルサウスという世界秩序の中で台頭してきた勢力が、このＷＣＨのパンデミック条約という最新の世界情勢の中で存在感を表しているっていうのが今、起きている事だと思うんです。これは大転換だと思うんですよね」

水島「そうですね」

及川「そんな中で先進国が追いやられているんですけど、パンデミック条約の未来が最も暗い理由の一つは、アメリカとイギリスがもう駄目だということです」

水島「うんうん」

及川「イギリスはスナークという保守党政権ですけど、これが日本の岸田政権とそっくりでアメリカの傀儡ということで自国で物凄く人気が無いんですよ。そのスナーク政権が７月７日に総選挙をやるって言うんですよ」

水島「そうですね」

及川「解散総選挙」

水島「はい」

及川「これも、ほぼ間違いなく政権交代です。何か日本も同じで、本当に日本と、よく似ているんですけど、もうイギリスの方はほぼ間違いなく労働党に替わります。イギリスには、保守党と労働党の二大政党ですけど、野党の方の労働党は次に政権が替わったら、どういう内閣でやるかっていう Shadow Cabinet、影の内閣っていうのを創っている訳ですね。

この影の内閣の保健担当大臣になる方が、もう決まっている訳です。だから７月以降に、この人がイギリスの保健担当大臣になるんですよ。この人が今、何て言っているかっていうとパンデミック条約には絶対に署名しないって、はっきり言っている訳です。それは民意を受けているからですよ」

水島「うん」

及川「民意を受けているので、もう、はっきり言っています。それに呼応するかのように、現在の保守党の方の保健担当大臣も、この案では受け入れられないなんて言い始めているんですよ。だからイギリスは、もう無いです。このパンデミック条約に入ることはない。イギリスって推進していた国なので掌を返しているんですよ」

水島「うん、そうですね」

及川「それから、このパンデミック条約を最初に提案したのはバイデン政権です。元々バイデン政権の案だったんですよ。先週辺りバイデン政権のブリンケンが何て言っているかというと、近い将来、この条約が合意することは無いだろうと悲観的になっちゃっているんですね」

水島「うん」

及川「なので、近い将来、合意することがないとか言っている間に、アメリカは１１月に、大統領選挙がある訳ですよね。そこで、もしトランプさんが勝った場合、トランプさんは、もう明確に選挙公約の一つとして、ＷＨＯにはアメリカの予算を出さないと。実質、もう、脱退する事を明言している訳ですね。ですから、仮にＷＨＯが、このあと何とかしてパンデミック条約を強行したとしても、今回、決まらなくても年末、１１月か１２月に特別総会をやるっていう案があるんですよ。

普通、やらないですけど、それをやるっていう案があって１１月か１２月迄の年内に何とか合意して可決させるっていう流れがあることはあるんですね。でも、その頃にはアメリカもイギリスも、もう政権が替わっているんですよ」

水島「うん」

及川「だからアメリカ、イギリス無しで、どうやってやるんでしょうかね。このパンデミック条約の中身っていうのは、めちゃめちゃ、金がかかるんですよ」

水島「うん」

及川「凄い金がかかるんです。次のパンデミックが起きた時、それに合わせた、まぁ、YouTube で言えないものですね。そういうものをつくる訳ですよ」

水島「うん」

及川「主に先進国がね。それを貧しい途上国に分け与えるっていうシステムを創ろうとしている訳です。これねぇ、凄い金がかかるんですよ。その資金調達が出来ないから今、合意できないんですよ。アメリカもイギリスも抜けちゃったら一体、何処がお金を出すんでしょうか。まさか日本じゃないでしょうねというのが現状ですね。でも、これぐらい世界は確かに大転換の日を迎えようとしていると思います。そうなると、日本は自ら転換できないかもしれないけど、転換せざるを得なくなるんじゃないかという風に感じております」

水島「正にその通りで、今、その先頭を切っているのが、このお父さんっていうことです。我々の仲間がプロのイラストレーターでして、常にこういう形で似顔絵を描いてくれている訳です。

岸田氏は、お金をばら撒いていると言われていますが、でも、これがミソなのは、ここで、バイデンの尻尾の方に、実は、未だあるんだよという人達が色々居るんだよというパターンですね。今、及川さんが言った大事な事、それと皆さんが知らなきゃいけないのはＷＨＯというのは各国がお金を出しているっていうことになっているけど、現実にはビル・ゲイツの財団、ベリンダ財団ですか。ゲイツ・ベリンダ財団っていうのが結構、大株主になっているというね。大株主って言い方はあれですけど、そういう意味では、こういう影響を、この人が代表されるような人達が非常に力を持っている。

ただ、今、及川さんの指摘で凄く大事なことは、やっぱり、そこの人達が簡単に今、自由に出来なくなりつつあるんじゃないかっていうことですよね。これは大きい事だと思います。これがグローバルサウスとかね、様々な動きだと思います。特にインドですね。

この間、インドとイランとロシアが縦軸でサンクトペテルブルクからムンバイまでイランを通って鉄道を引く約束をしました。これは象徴的な事だと思いますね。はい。というようなことで、今、大変、重要な指摘を戴きました。では近藤さん、お願いします」

近藤「はい。もしかしたら、私は、この場には、あまり相応しくないようなこと…」

水島「そんなことないですよ、そんなことはないですよ（苦笑）」

近藤「と思うんですけれども、皆さん、岸田内閣に対して、色々と批判的なご意見を沢山、お持ちの中で、敢えて、私は、あの岸田さんを評価できる部分があるとしますと…」

水島「あぁ、是非、それは」

近藤「はい。私は子供を守る立場としてやっておりますので、日本版ＤＶＳが、ついに衆議院を通ったっていうことは凄く評価していいかなって言う風に思っています。子供に対する性被害っていうのが増えて来ている中で、保育園とかでもね、これは YouTube 的に言って、大丈夫ですか」

水島「あぁ、いいですよ。はい」

近藤「保育士さんが猥褻行為をして捕まってしまうとか…」

水島「それは、どんどん言って下さい」

近藤「はい。今日の新聞報道でも小学校の先生が子供に猥褻なことをしたと報じられました」

水島「そうですね」

近藤「えぇ、やはり性的な犯罪っていうのは繰り返すことが多いので、それを止めるには、どうしたらいいのかということで、子供に関わる職業に就きたい人の前科、前歴を調べるというシステムを作り上げたっていうことを、子供家庭庁ですけれども、岸田さんの評価に値する部分ではないかなという風に思っています。

あとは、例えば、及川さんの話だとか山中さんのお話の中にもありましたように、何かしら日本人の人口を減らすような、何か、そういった思惑を持った人達が居るんじゃないかっていう中に対して、もしかしたら、これも、ひとつ、そうかもしれないと思っているのが出生数が減り続けている。赤ちゃんが全然、生まれて来ないというところも、やっぱり私は凄く心配に思っておりまして…」

水島「これ、２０万人、いっぱいよりも減ったって聞いています」

近藤「あぁ、そうですね。もう、今年もそうです」

水島「はい」

近藤「もう昨年度、７９万人を割りましたけれども」

水島「そうですね」

近藤「もう、今年も、更にそれすら割るんじゃないかっていう勢いで、中々赤ちゃんが生まれて来なくて、それが、やっぱり昨年とか一昨年とか、その前のお注射のせいなのかどうかというのは、私にも判りませんけれども、その若い世代、あとは若い夫婦達の意識っていう部分も、この戦後の教育の中で少しずつ変わって来てしまったんだろうなっていう風に思います。

やはり国家っていうのは、国に家って書いて国家って読めますよね。そうしますと、国家っていうのを考えた時に、どうしても家庭は切り離して考えられないっていうのが、私の持論なんですね。なので、その家庭から、どうやって国を蘇らせていくのかっていうのを考えていくことも、日本が大転換するかどうかに関わって来るんじゃないかなぁという風に、私は思っております」

水島「うん」

近藤「はい」

水島「非常に大事な指摘で、我々も、いつも子供の問題のね、今、そういう討論もあげているんですけど、さっき、ちょっと言った様に、所謂、コロナ騒動でね、やっぱり、その影響かどうか断言は出来ませんけども、数字的には間違いなく２０万人ぐらい生まれる赤ちゃんが減っているっていうようなことも含めて、実は、移民政策とか、そういうのも、みんな、繋がっているんじゃないかってね」

近藤「うんうん。そうですよね。だから子供が沢山生まれる、私は多産化って言うんですけども、多産化したら解決できる社会的な課題っていうのは沢山、ある訳ですよね」

水島「そうですね」

近藤「だけれども、やっぱり、もっと子供を産みましょうっていうと、所謂、フェミニストに叩かれてしまうとか、特に水島さんとか男性がもっと子供を産みましょうって言うと、それは、また叩かれて、うん」

水島「何かね、女は子供を産む機械と思っているのかとかね」

近藤「そうなんですよね」

水島「そう言われちゃうんですよ」

近藤「うん。だから、やっぱり、こういう問題こそ、まぁ、私も娘が３人おりまして、もう育てあげましたので、育て上げた女性達こそが声を挙げて子供を大事に育てていく為に、お家で、しっかり子供を産めるようにしようっていうことを言っていくことが、これからの日本にとっても大事な事じゃないかなぁって思います」

水島「そうですね」

近藤「はい」

水島「だから最近、ずっと岸田内閣が色々やっている、例えばＬＧＢＴとかいうのはね…」

近藤「う～ん。はい」

水島「別に同性愛の人が居てもいいしね」

近藤「はい、勿論」

水島「全然、そんな誰もね、殆ど日本の場合は宗教的な縛りが無いから、勝手に、皆さん、やりたい方はやるし、誰も文句を言わないよっていうことをやっているんだけども、法律で決めるっていうのがね」

近藤「う～ん」

水島「ということ自体が、やっぱり、ある意味で言うと、強引に、今、おっしゃっていたね、まぁ、普通の９９％の男女のね、普通、結婚して子供をつくるとかいうことが、これまで、ずっと人類が続けて来たことを、やっぱり国の中で、法的に妨害するっていう形になっているんじゃないかっていうね」

近藤「う～ん、だから、もしかしたら、少子化というか子供が産めないような精神というか、意識に子供達を変えていくのがＬＧＢＴ理解増進法なんだろうなっていう風に、私は思っています」

水島「子供に、そういう教育をするっていうねぇ」

近藤「いや、もう、とんでもないことですね。うん」

水島「実は、あれは、それをしているんですね」

近藤「うん」

水島「もうアメリカでは始まっているっていうね」

近藤「うん」

水島「つまり男性か女性かとか選ぶことが出来るよ、みたいなね」

近藤「う～ん（苦笑）」

水島「そういうところまで、今、始まっているっていうのは、前にチャンネル桜の討論でも出ているんですけども。また、この家庭の問題も、あとで、また」

近藤「お願いします」

水島「はい。モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい、いつも有難うございます。実は、ここにお集まりになっていらっしゃる方々、みんな、大好きです。前からお世話になっております。誘って戴いて本当に有難うございます。今の日本ですけれども、今の日本は戦争中です。第三次世界大戦は、いつから始まるかという言葉を、最近、よく耳にしますが、もう始まっています。２０１６年から始まりました。

それはディープステートがトランプを狙ってクーデターを行った瞬間から始まった訳です。トランプが大統領になってから始まった訳ですけれども、本格的に世界で広まったの

は、敢えて、私達は東ドイツに住んでいるので言わないんですけれども、２０２０年、まぁ、２０１９年の終わりから、グローバリストの世界大戦が広がりました。

今、日本には勿論、もう来ていて、日本人が殺されています、死んでいます、この戦争では。死んでいます。殺されています。誰が日本人を殺しているかと言うと、エマニュエル総督府とか岸田売国奴」

水島「うん」

モーガン「先程、お見せ下さった武見という気持ち悪い奴とゲイツっていう、もっと気持ち悪い奴と、まぁ、バイデンっていう偽大統領とか…」

水島「これですね」

モーガン「奴らが日本で殺しています。今、殺しています。殺されています。それは戦死です。戦争で殺されている人間です。歴史の中を探しても、岸田のような売国奴は存在しないですよ」

水島「うん」

モーガン「岸田だけ自分のカテゴリーに居る訳です。あの人がタイタニックの船長です」

水島「うん」

モーガン「しかし氷山を目指してスピードを上げて、ぎゅんぎゅんと、この日本を、もう、全部、みんなを殺そうとしている奴です。今日は、ある条約についてテーマかと思うんですけれども、ちょっと用意したんですが説明しても宜しいですか」

水島「いや、どうぞ」

モーガン「その条約については、皆様、ご存じかと思うんですけれども、最近、林千勝先生も多分、この人の名前を採り上げられていると思うんですけど、Dr, Meryl Nass。宜しければ是非、検索してみて下さい。先程、申し上げた通り、私達は東ドイツ、まぁ、ソ連に住んでいますので、残念ながら、このような情報をお見せする事は出来ないんですが、ナス先生がおっしゃっていること、ちょっと、こう、簡単に説明したいと思います。

ＷＨＯは国連の中では唯一、憲法を持っている存在です。ということは、あの機関が他の国と条約締結することは可能です。だからグローバリストがＷＨＯを通して今、世界中に条約を押し付けようとしています。しかし、ＷＨＯに雇われている人々が外交特権を持っていますので、いくら嫌なことをやっても裁判にはならない」

水島「うん」

モーガン「まぁ、犯罪やり放題っていうことでして、大前提としては、その条約の中で何が行われているかって言うと、例えばOne Healthっていう言葉がよく出ます。One Health。健康の定義を変えて、それが大前提になっています。One Health。One Healthという言葉があの条約です。この条約の中にも出ていますけれども、何条か…あっ、第５条です。

One Health Proved Pandemic Prevention Preparedness and Responsible～、One Health、One Health、One Health on Parade。偽大統領が今、占領しているホワイトハウ

スが出している資料に基づいても、One Health、One Health、 One health、One Health という言葉がオンパレードですよ。One Health。それで One Health って、どういう意味かって言うと、公衆衛生って言うよりも生態系の意味です。つまり全世界、地球の健康です」

水島「うん」

モーガン「人間が殺されても地球の健康が一番、大事だという意味です。人口削減そのものです。人間よりも地球の方が大事だっていう考え方です。健康そのもの、その定義が変えられています。もう我々が言っている健康とあの条約が言っている健康は全然、違います。

もうひとつ。この条約の中には、世界の国々が自分の国民の情報を統制しなければならないという義務が生じています。それが第１８条かと思うんですけれども Article 18。Communication and Public Awareness。これは多分、お見せしても大丈夫かと思うんですが、条約から抜粋したもので Communication and Public Awareness。Misinformation とか偽情報とかデマとか虚報、 誤報とか、それを普及すれば駄目っていうことで、The Parties、まぁ、国ですね。国家がそれを、しっかりと取り締まらなければならないという義務が生じています」

水島「うん」

モーガン「つまりモーガンが言っている事は偽情報だと言ったら、何が行われるかって言うとオーストラリアを見て下さい」

水島「うん」

モーガン「警察官が来る。手枷をかけて収容所まで行きます。そういうものですよ。日本でも、そのようなことが起きます。そうさせているのは拝米保守です。親米保守です」

水島「うん」

モーガン「責任が重いです。反省しよう。次、BioHub っていうものが出来ます。その条約が通りますと、バイオハブ。バイオハブって、どういうことかって言うと、病原体を共有するネットワークです。Sharing of Biological Material with Epidemic or Pandemic、要は、全世界のネットワークを使って伝染病、疫病の可能性のある生物物質を共有する。例えば、このようなネットワークがございます。そのネットワークに入っているのはＨＫＵ、Hong Kong University、要は中国が手に入れ放題です。パンデミックに使えそうなものですね。

敢えて名前は言わないんですけれども、中国が得放題です。もし、中国が他の国の気の狂っている政府が開発した生物物質を手に入れたいと思ったら簡単に出来ます、この香港経由で BioHub っていうことが出来ます。要はグローバリストが人類を無くす為に動いていますよ。

まぁ、敢えて名前は言わないんですけれども、ある条約、あるものを禁止している条約があります。１９７２年に署名されたある危険なものを禁止している条約があります。その条約の第１条、第２条、第３条、第４条をよく読んでみて下さい。パンデミック条約をきちんと読んだ上で、今、言及させて戴いた条約を見て下さい。その前の条約が違反されて

いるかどうか判断して戴きたいと思います。

最後ですけれども、あと２点だけです。日本国内でも来るんじゃないかと思うんですけれども、これがUnited States Code、セクション３００ＡＡ２２、Standard of Responsibility、これは合衆国の法廷です。これも情報統制の為、見せることは出来ないんですよ。例えば、あるものを製薬している会社が、あるものが投与されて人々が負傷する場合、または、死亡する場合、そのあるものを作っている製薬会社は一切、責任と賠償する責任は一切、生じないっていう法律があるんですよ。連邦政府の法律です。要は、その製薬会社が人を殺しても全くオッケーです。その為にこの条約がございます。

最後に、この条約だけじゃないんですよ。色んな角度からグローバリストが日本を目指しています。日本人をもっと殺したいと思っています。例えば、およそ４か月前、総督府が出しているフェイク・ニュースですけれども、ＣＤＣ、アメリカ疾病予防管理センター、Center for Disease Control Opens New East Asia and Pacific Regional Office in Japan。それはＣＤＣとかアメリカの連邦政府は、あのものの名前は言わないですけれども、それを開発したんですよ。今迄、この４年間で全世界を苦しませてきたものを開発したんですよ。中国のせいじゃないですよ。あれはアメリカの連邦政府のサイコパスが創って出したものなんですよ。

だから中国のせいにしたいと解るんですけれども、中国は随分、気持ち悪い国ですが、もっと危険なのは、この国を占領して支配している連中です。サイコパスの死のカルトの連中です。例えば、このパンデミック条約だけじゃなくて、このアメリカ疾病予防管理センターの中にも充分、サイコパスが随分、巣食っていますので注意が必要です。

日本国内では、武見敬三っていうグローバリストとか、あのデマタロウとかっていう訳の分からない人物とか色んなグローバリストが自民党の中に入っています。それを庇っているのは日本国内の拝米保守です」

水島「うん。そうですね」

モーガン「自分達は愛国者だと装っていて、でも、そうじゃなくて、日本人を殺す為に今、動いています。日本は戦争中です。以上です」

水島「うん」

及川「そのＣＤＣが日本に出来るっていう話ですね」

モーガン「そう。もう、もう来ています」

水島「もう事務所が出来たのかな」

モーガン「もう支局が出来ると」

水島「なるほどね」

モーガン「実際にやっているかどうかは分からないんですけれども、支局をやりますと発表しています」

水島「うん。そうですね。何か今、大変、韜晦した言い方をしなきゃいけないみたいなことがありましたけど、でも本当に現実的に、それが具体化していて、そのスタートを、こ

の人が本当に先頭切って」

モーガン「はい、そうです」

水島「これねぇ、及川さんと話した時、日本は今迄、アメリカの支配勢力に言うことを聞かされているって言ったけど、今や岸田さんは先頭切って、もう親分、私が先に行きますっていう鉄砲玉みたいなね、こういうグローバリストの役割を自ら果たそうとしているっていうね。だから我々の国を滅ぼそうとしているんじゃないかっていうね」

モーガン「そうです」

水島「そこまで言われてもしょうがないみたいなね。こういう人達は未だコオロギの粉食は、及川さんでしたっけ、言ったの、あのガチャポンっていうのかな、ガチャポンであるらしいのでね。あのコオロギ（失笑）、コオロギのお菓子が、いや、初めて聞いたのは京都の人から聞いたんだ。何かガチャポンありますよって。こういうものにまでね、子供の食べ物の遊びのおもちゃ迄、こういう所に入って来ているというねぇ。こいつらは中々やりますよ」

モーガン「サイコパスです」

水島「凄いですね」

モーガン「死のカルトのサイコパスです」

水島「うん。まぁ、そうですけど（笑）」

モーガン「全員です」

水島「はい」

モーガン「それを理解して戴きたいと思います」

水島「はい、そういう人達が今、現実に政治を進めているっていうことだと思います」

モーガン「そうです、その通りです」

水島「はい、有難うございます。折本さん、お願いします」

折本「はい。そうですね、今の政治状況を見ていますと、もう岸田政権も死に体といいますかレイムダックのような状況になっていまして、一言で言うならば、閉店前の一斉在庫処分じゃないですけども、日本閉店セールをやっているなという感じが致します」

水島「あぁ、なるほどねぇ」

折本「特に先の岸田訪米ですね」

水島「はい」

折本「非常にニコニコしてバイデンと会っていましたけれども、その中で、どういう売国的な密約が交わされたのかなぁっていうのを大変、危惧しています。今、国会の議論を見ても、重要広範議案で首相は本会議だとか委員会に出席して質疑に答える。何か４つあるってことで、ひとつが食糧農業農村基本法で、もうひとつがセキュリティ・クリアランス

法案。

あとが子供子育て支援法ですね。要は、その異次元の少子化対策の為に保険料率を引き上げますよという法案と、あとは出入国管理法の改正というところで、これも結局、国会でも、ちゃんと議論をしていないなという風に見えるんですね」

水島「うん」

折本「ただ、実は、やはり国の主権に関わるような非常に重要な法案でありまして、例えば、この食糧農業農村基本法も、初めて食糧安全保障って言葉が入ったっていうことばかり言われるんですけども、実際、委員会で議論を見ていますと、事実上、この食糧自給率の目標を放棄しているんですね」

水島「うん、うん」

折本「なので、結局、表看板は上手く改善しているように見えても、中身は、儲かる農業とか、もっと、そういう規制緩和して、この生産性を上げて大規模集約して、もっと株式会社に農業をやらせるとか、要は、そういう新自由主義的な方向の法改正になっている。あとは、そのセキュリティ・クリアランス法案も何か聞こえはいいですけども、要は、アメリカの為に軍事開発した機密を漏らすなよっていう、まぁ、アメリカの為の法律なのかなという気もしますし（失笑）、子供子育て支援法はいいですけども、やはり、一番、重大なのが出入国管理法だと思うんですね」

水島「うん」

折本「正に今迄は一応、技能実習生という形で国際貢献っていう建前でやっていた訳ですね。だから移民政策を執らないという原則は崩していなかったんですけども、今回、法改正で初めて国際貢献の看板を捨てて、人材確保の為に外国人を入れるということで、しかも、その技能実習生も、今迄は期限付きでしたけども、何年かやったら永住権も貰えますよと。そして家族帯同もオッケーですよ、家族を呼んでもいいですよというような形で、本格的な移民政策に舵を切った訳ですね」

水島「うん」

折本「先程もお話でありましたけど、こういう正にアメリカの移民政策を後追いするようなことをやっていると。あとＮＴＴ法の改正ですね」

水島「うん」

折本「これも、まぁ、今回は別に何か外資に株を売っちゃうとか、そこまでの内容じゃないですけど、その一つの布石だと思うんですね」

水島「そうです」

折本「やっぱり将来的には、もうＮＴＴ法そのものを廃止するということを検討するっていう風に書いてある訳ですから、だから、そういったところで非常に売国的な法改正が行われていると。先の岸田訪米も結局、このＮＴＴ法の改正っていうのが、ひとつの手土産としてあったのではないかということも言われています。

私がこの岸田訪米を見ていて非常に悔しいな、何か情けないなと思ったのが、自衛隊と米

軍の指揮権の枠組みの見直しということで、ひとつは、自衛隊が今年度中に統合司令部を創りますよと。あとは今、太平洋司令部の傘下にある在日米軍の権限を強化しますよと。要するに統合司令部の自衛隊と在日米軍が一体化して、この指揮権を共同で運用しますみたいな、そういう合意をしている訳ですね。これ、あくまでも、例えば韓国は有事の際には韓国軍の統帥権、指揮権っていうのは自動的にアメリカに移譲されると」

水島「うん」

折本「要は、米軍の中の一部になってしまう訳ですけども、今回の統合司令部、指揮権の枠組みの見直しっていうのも一応、独立しているという風に言っているんですけれども実際には、結局、有事の際に自衛隊の指揮権は、アメリカに譲り渡すみたいな密約が交わされているのではないか」

水島「うん、そうですね」

折本「今年、１１月頃ですかね、年末に２プラス２が開かれるとか言われていますけども、結局、その中で詰めの議論が行われていくのではないか。だから、このような形で、我が国の主権が正にレイムダックの岸田政権の中で、もう閉店在庫一掃処分じゃないですけど閉店セールじゃないですけども、売り飛ばされているんじゃないかということを、大変危惧しております。パンデミック条約にしても、まぁ、本来であるならば、これは条約の中でも謳われていますけども、それぞれの締約国がその条約に基づいて、どのような、そういう施策を、法律をつくるかというのは結局、それぞれ各国の主権の中のその保健政策に委ねられているということが、つまり主権の独立ということが、一応、条約の中で謳われている訳です」

水島「うん」

折本「ですから別に変な条約が出来たとしても、実際、それに基づいて法律を作る時に主権がしっかりしていれば、ガードすればいい訳であって、ただ問題なのは、我が国に、その主権が無いということだと思うんですね」

水島「うん」

折本「ですので結局、そこの部分での免疫が無いので、どんどん、そういうグローバル勢力の食い物にされてしまっていると。草刈り場のような状況になっているというところなのかなと思います。そういった中で、先程、グローバルサウスの存在感が増しているというお話もありましたけれども、私も２０１２年から２０１５年頃まで３年ぐらいインドにおりまして、丁度、私が行った時にはモハン・シン政権だったんですね。その国民会議派っていう、要は日本で言う自民党みたいな勢力がずっと長年、与党だったんですけども、それを牛耳っているのがガンディー一族ですね。ジャワハルラールが居て、その娘がインディラ・ガンディー」

水島「インディラ・ガンディーでしたね」

折本「インディラ・ガンディーの息子がラジブ・ガンディーって人で、ラジブ・ガンディーがイギリスに留学している時に知り合ったイタリア人の女性がソニア・ガンディーって言って、長年、その国民会議を牛耳っていた、今も牛耳っている人ですね。ラジブ・ガンディーとソニア・ガンディーの息子が、今、ラフル・ガンディーって言うんですけども、ずぅっと、この国民会議の党首をやって今、野党に甘んじている訳です。

要するに国民会議派の人達が、まぁ、ソニア・ガンディーなんてイタリア人ですから、まぁ、白人な訳ですよ」

水島「うん」

折本「国民会議の今の党首の息子、ラフル・ガンディーも肌が白いんですね。白人みたいな顔をして何処からどう見てもインド人に見えないんですよね」

水島「うん、うん」

折本「だから、そういう一つの勢力が外資と組んでグローバル勢力と組んで、要は、インドの国の利権を完全に牛耳ってきた訳ですよね」

水島「うん」

折本「だから、それに対するひとつの革命と言いますか国民主義革命として起こったのが、２０１４年のインド人民党による政権交代であったということで、正に、今、このインドで総選挙が行われていますけども、支持率は圧倒的にインド人民党の方が高いということなので、そういう意味でインドはナショナリストの勢力がグローバリストから政権を奪還したと」

水島「うん」

折本「それが正にインドの台頭に繋がり、グローバルサウスの影響力の拡大に繋がっているのかなぁという風に、私は見ております」

水島「そうですね」

折本「はい」

水島「有難うございます。我々は３１日に日比谷で反パンデミックの集会がありますが、台風が来るので心配ですけれども。それと同時に、やっぱり一番、我々が３１日にやるのは、親米保守と言われる人達、国基研とか、そう言われる人達が憲法改正っていう名の下に、はっきり言うと、護憲ですよ。日本国憲法を何も変えないで、緊急事態条項とか自衛隊の明記というものをくっつける。これで憲法改正って言っている。だから前文も九条二項も一切、変えない。こういう流れですね。だから、折本さんが今、おっしゃってくれたことと、親米保守と言われるね、今迄、保守だと自称していた人達が、いかにインチキだったかっていうかね、結局、日本の主権とかそういうものを取り戻すことで、いよいよ本性を現してしまったっていうね、つまり、はっきり言うと、誰もが恐らく、今、これを観てくれている人達は、日本国憲法というのは、基本的にアメリカ占領軍が押し付けたものだから、取り敢えず日本の国民が自主憲法を制定するっていうのが原則だけど、中々、急には難しいと言われているから、じゃあ、憲法改正で、せめて前文や自民党案だった国防軍の創設とか、こういう当たり前のことをやろうって言ったら、それも、また戻っちゃった。

戻ったって言うか、今の憲法改正、今度、武道館でやるって言うんですけど、我々は、その周りを取り囲んで反対を言うんですけどね。つまり、こういったパンデミック、そして保健条項もそうですけど、あと、もう一つ言うと、緊急事態条項、これと憲法改正、嘘ですよ、これ、憲法改悪と言うよりも護憲ですけれども、こういうものをパッケージで今、

やろうとしている。

これが一番、極めて危険でね、特に、このパンデミックで言うと、流行病と言うか感染症まで緊急事態に入れている。というのは、今、もう完全にゼレンスキーが憲法を無視してね、ずっと大統領を続けていますけど、岸田さんだって、もし、これが通っちゃったら、いつまで経っても緊急事態だって言って首相の座に居ることが出来る。こういうようなことが起こる訳です。

特に感染症を入れるっていうのは非常に危険な問題ですから、皆さんは騙されないようにして貰いたいですね。そういうことは今、全般に岸田が馬鹿なふりしているのか何だか、いや、他の後ろに誰かが居るのか分かりませんけどね、やりたい放題やっていると、さっき言った最後の特売閉店セールの本当にやれるもんならやってみなっていうことでやっているみたいな、やけっぱちみたいな感じでねぇ、つまり安倍さんが暗殺されたことから、凄く、そういうのがあるんですけどもねぇ、やっぱり、これは本当に問題だということですけれども、皆さんに一言ずつ、意見をお聞きしたんですけども、岡さんから、お願いします」

岡「はい」

水島「今、聞いてね」

岡「はい」

水島「やっぱり、みんな、繋がっているって言うかね」

岡「はい」

水島「うん、それと、やっぱりね、この人は性格的に問題で、今、おっしゃるようにねぇ」

岡「うん」

水島「人間的に本当に人情とか優しさとか、あまり、そういう言葉、嫌いだけど、優しさとか人情とか人の心とか、そういうのを、本当に感じない人だよねぇ。でも、ほんと、これは、どうですか」

岡「今、ジェイソン・モーガンさんがサイコパスっておっしゃったんだけど、正にサイコパスですよね」

モーガン「そうです」

岡「要はね」

モーガン「はい」

岡「その言葉の全てが嘘なんですよ」

モーガン「そうです」

水島「はい（笑）」

岡「岸田さんの言っている事というのは全てが嘘です」

水島「そうだよね」

岡「移民を入れないと言いながら、全く移民を入れているじゃないですか」

水島「そう」

モーガン「はい」

岡「それで、今、もう国会では議論なんかしていないですよ。ただ単に閣議決定で、議員も知らない内に重要な法案が次々と成立しています」

水島「そうですね」

岡「閣議決定で」

水島「うん」

岡「それで、例えば３月１日に国会では、その裏金問題をしきりとやっているんだけれども、実は、全然、そうではなくって、例えば放送法の改悪とかね、それからＮＴＴ法の改悪とか、それから地方自治体法の改悪ですよ」

水島「うん」

岡「こんなの一日の内に３つも閣議決定しているんですよ。でも、テレビは殆どそれを言わない訳ですよ。テレビは、ただ裏金問題で、与党と野党が折り合わないとかね、そういうことを、ずっと言い続けているんだけれども、その裏でとんでもない、その法律が閣議決定をされている訳ですよ。閣議決定っていうことは、要するに閣僚だけですよね。そこに居る閣僚だけが、ただ、はい、はいって言って判子を押しているだけですよ。殆どの議員は、知らないですよね。だから、私は、今の岸田政権の下では、もう民主主義なんて何処にも無いんじゃないかなってね」

水島「うん」

岡「民主主義じゃないと思います」

水島「うん。そうですよね」

岡「私が一番、凄くおかしいなと思ったのは、防衛装備品の違憲三原則ってあるじゃないですか」

水島「うんうん」

岡「要するにライセンス装備品ね。ライセンス装備品は今迄、日本は他国に輸出をしないっていうことが一応、原則だった訳ですよ。だからアメリカには原則、輸出するけれども、それは部品は輸出してもいいけれども、完成する装備品っていうのは、つまり兵器ですよね。兵器は原則、輸出は出来なかった訳じゃないですか。それなのに去年、急に、防衛装備品三原則を勝手に、今迄、やらなかったようなことをやって、それでアメリカにＰＡＣ３ですか、ＰＡＣ３っていうのを輸出することになった訳ですよ。

これは、どうして、こういうことになったかって言うと、結局、バイデン大統領が、あまりにもウクライナに兵器をどんどん送ってしまって、アメリカの方でＰＡＣ３の在庫が払底してしまっていた訳ですね。

日本にちょっとアメリカに輸出しなさいよっていうことになって、結局、それを勝手に議論もせずにしてしまっているんですよ。でもロシアは、それをしっかり判っていて、ロシアの広報官は、日本がアメリカに送ったＰＡＣ３が、もしウクライナで使われたとすれば、これは日本が結局、この戦争に加担したということだと」

水島「いや、そういうことですよね」

岡「この戦争を長引かせることにね、日本は加担している訳ですよ」

水島「うん」

岡「だから日本は意図的にではないにしろ間接的にロシアを敵に回しているし、結局、岸田さんは、私達がロシアの敵として攻撃されてもおかしくないような状況を創り出している訳ですよね。でも、そんなこと、誰も言わないし、国会でも議論もされていない訳じゃないですか。だから、こういう風に知らない内にどんどん日本の形が変わってしまっている」

水島「うん」

岡「物凄く怖い事だ」

水島「うん」

岡「今の岸田政権の下で憲法改正なんかしたら大変なことになるなと思って、私は今の岸田政権の下での憲法改正は絶対に反対です」

水島「うん」

岡「そもそも自民党は自主憲法制定って言っていたんであってね、憲法改正ではないじゃないですか。要するに自主憲法を創ればいい訳ですよね」

水島「うん」

岡「それなのに勝手に九条の三項を作って加えるっていうね」

水島「加憲ですよね」

岡「これは加憲ですよね」

水島「うん」

岡「加憲は、おかしいし、むしろ九条の二項を削除すればいいだけの話だと思います。だから、それをやらないで、何故、もっと面倒臭い加憲をしてしまうのか」

水島「うん」

岡「とにかく、今の岸田政権のやっていることは全く言っている事とやっている事が非常に違うということで不信感しか無いですね」

水島「そうですねぇ。取り敢えず、よく、こういうのはチャンネル桜の討論に出るので、今、指摘があったので言っておくと、そのまま加憲にすると自衛隊員は特別公務員のままですね」

岡「うん」

水島「軍人じゃないんでね、万が一というか、まぁ、こういうこと、何か起きた時、捕虜になった時もジュネーブ条約で正式な捕虜として扱われなくていいという、民間人のゲリラ兵みたいなね。だから地方公務員が銃を持ってやった扱いにされちゃうっていうね、こういうことも、基本的には今の平時では他の国の軍隊も自衛隊は軍隊として扱っていますけどね、こういうような状態も含めて物凄く欠陥だらけですね。

それから国の交戦権を認めないっていうね、それから陸海空の戦力も保持しないっていうね。これでは主権国家って言えないから、我々は変えたかった訳でね。それを全部、放り出している訳ですよ。これ、本当に日本のねぇ、うちは保守系のチャンネルと言われていますけども、本当にこれでいいのかねと。日本会議の皆さん、国基研の皆さんね、色んな形で、私は昔、一緒にやっていた仲間でね、自民党の保守系と言われる人達も、どうして、こんな状態を容認するんだっていうことを改めて、今、せっかく指摘して戴いたんでね。

岡さんも、ずっと一貫して、この熱意でやってきたんで、素直にもう一回、考えて貰いたいと思いますね。これは憲法改正じゃないよと。アメリカにもう一回、再従属する植民地憲法だよということを思い出して戴きたいっていうことを言いたいんですけど、まぁ、山中さんは、こういうアメリカの問題ね、だから、おっしゃるように本当にアメリカの転換と全部、連動させられているっていう状態だと思うんですけどね」

山中「はい、今の岡さんの話や皆さんの話を聞いていて、結局、今の岸田さん、岸田政権って、その性格ですよね」

水島「うんうん」

山中「まぁ、かくも色々と変な首相が居たりはしたけれども、要は、ここまで、何故、これ程、対米従属を身体で表し、心で表し鼻で表し、口で表しね（笑）、全て、ははぁ〜っというね、水戸黄門じゃないけどね、彼は地方代官ですよ、僕、いつも言っちゃうんだけどね。

総督っていう人が一人、アメリカ大使館に居てね。いやいや、ここまで哀れな我々は、その地方代官の下に居る百姓という人間達というような位置づけになっちゃっている事を…」

水島「なっていますよ、はい」

山中「マスコミ、メディアがその通り報道しませんから。事実を事実として報道しないですね」

水島「そうですねぇ」

山中「非常に素晴らしい見識の方が、メディアで報道したことは事実になると言ったんですよ」

水島「まぁ、実際、そうでしたね」

山中「はい。ということはメディアが事実を報道しないことで、事実じゃないっていうことになっちゃうんですよ」

水島「うん、うん」

山中「これぐらい恐ろしいことはなくて、今回、実は、岸田さんのカウンターパートとして、このバイデンという人、バイデン・岸田という非常に似た性格って言っては変ですが、両方とも、あまりって言うか、全然、頭脳的に能力が優秀であるとかとは、まるで反対の人なんですね、特にバイデンという人は」

水島「そうですね（笑）」

山中「ただ、キャリアが長いんですね、５０年近くワシントンに居る」

水島「はい、そうですね」

山中「大学だって裏口で入ったのか、ちゃんと入ったのかどうか知りませんが（笑）、大学を出たぐらいの人ですからね」

水島「はい」

山中「一度も能力が優秀だからってなった人ではないんだけど、共和党の政治家は、ずっと何十年も、そういうことを、はっきり言ってきているんですよ」

水島「そうですね」

山中「まぁ、トランプさんが一番、言っていますけどね。ただ、これは当初、バイデンさんが大統領になった時から言われたのは、あれはオバマ第三期政権であると」

水島「うんうん」

山中「だって、あの閣僚全部、みんな、オバマの時の次官や局長クラスが、そのまま長官や次官になっていますからね。ということは、今のバイデン政権は、ほぼ全部、オバマの二期のまま、まぁ、だからクリントン達の残党ですよね。そういう人達がやっている。

そして、私は、あの時も、ずっとアメリカで小さな会社をやって仕事をしていますんでね、皆さん、アメリカのオバマの８年って凄くいいようなイメージをお持ちですよね。日本のマスコミだって、そう報道しているから。現実に、我々みたいな小さな会社をやっている人間にとっては本当に大変だったんですよ。簡単な例で一つ言いますとね、オバマケア」

水島「あぁ」

山中「あれって、皆さん、凄くいいイメージでしょ」

水島「日本で、そう報道されていますね」

山中「ねぇ。そうでしょ」

水島「はい」

山中「低所得で一番、貧しい人達、みなさんにも保険をあげるから、これは、とても貧しい人達を助けるものですよと。何のことはない、現実、我々、そこに居た人間にとって、簡単に言うと、全部、ほぼ全て我々ミドルクラスの人の毎月の保険料が倍になったんですよ」

水島「あぁ…」

山中「えぇ。あのオバマケアっていうのは、それまで一番、貧しい人々、生活保護を中心とした下の２０％ぐらいの人々は殆ど保険が無かった訳です」

水島「うん」

山中「無くてもいいよと。無くても何かあった時に、シカゴ・シティでは大きな市の病院とかに行ったら、全くただで受けられるんです。だけど、そういうものがあるにも拘らず、一番貧しい人達にも全員、保険をあげなきゃいけないんだと。まぁ、カナダや日本のような国民皆保険のようなことでもって、スローガンはとっても良かったんだけど、何のことは無い、やってみたら、要は、この人達の殆どは、まず仕事が無い、収入が無い」

水島「うん」

山中「生活保護、４代、５代に渡って貰っている。これも私は本で書いたんですけどね」

水島「うん」

山中「普通、生活保護の４代、５代に渡ってなんて考えられないじゃないですか」

水島「うんうん」

山中「でもアメリカは、例えば、一番貧しい黒人街は、やっぱり１５歳で妊娠しちゃうのね」

水島「うん」

山中「そうすると、その子が３０歳になったら、もうお婆ちゃんになっちゃう。それが連鎖していくんですよね。そういうのがシカゴの巨大な黒人街にいっぱい居る。そういう現実を見ると、結局、どうやったって仕事も無きゃ、働かない、働く気も無い人達に強制的に保険に入れる訳だから、誰かが、この分を負担しなきゃいけない。全部、それがミドルクラスの我々のところに来て、その時、私のワイフは大学で働いていたんですが、今迄、毎月、３００ドルだった家族４人のやつがね、６００ドルになっちゃったんですよ」

水島「うわぁ～、それは凄いね」

山中「そのあと、９００ドルぐらいになったのがね、１８００ドルになっちゃったんですよ。我々家族４人で」

水島「う～ん」

山中「毎月１８００ドルの医療保険ですよ。病気してもしなくても」

水島「日本円で、大体、二十数万円ですね」

山中「はい。だから、そういうことが起こったっていうことは、日本のメディでは、まるで報道されない。そして、その引き続きが今のバイデン政権ですよ」

水島「そうなんですねぇ」

山中「えぇ。だから、これも、その時からリベラルな…私、今でも覚えていますけど、私

の娘はオバマ政権の時、高校生だったんですね。その高校は、大きな高校だったんですけど、そこの女子更衣室に、そこらの一人の中年親父がバーンっと入り込んで居座っちゃったんですよ」

水島「うん。うんうん」

山中「私は女性だと、女だと（笑）。外は男だけど」

水島「うん」

山中「中身は女だと。こうなっちゃった訳（笑）、それで、もう先生も生徒も、一番怒ったのは、やっぱり母親達ですよね。だけど当時のオバマ政権の見解は本人が女性だって言ったら、その性を認めるという訳だから、基本的に今もバイデン政権はそれで来ちゃっているんですね。

今、ＬＧＢＴがアメリカでどんどん先へ進んじゃって、これより、もっと過激なことが今、起きちゃっていますから、さっき水島社長が言われた、例えば子供に対する性教育ですが、僕も大きなアメリカの保守系の団体へ行ってね、その活動を支えている母親の人達と会ってきたんですが、今、小学校２年生の子供達の教科書を見たら、その性行為の描写が男性同士のやつですよ」

一同「う～ん…」

山中「もう、そんなものがあるんですよ。その母親方が怒って、皆さん、全米で声を挙げて戦っていますよね」

水島「う～ん」

山中「そういう現実が起きていて、我々日本人は、こういうことをほぼ全然知らないし、まず、メディアは報道しませんから。ＬＧＢＴはいいことだと。まぁ、いいって言うか、僕は、大人は自由でいいと思うんですよ。大人は。二十歳過ぎて手術するにしても。だけど手術する、しないも子供の１２～３歳までティーンエイジャーっていうか、性のホルモンが出ていない内にね、もう手術を親の承諾なしに出来ちゃうとか。或いは、注射も打てちゃうとかね。恐ろしい事をしていますね」

水島「想像もつかないけどね、でも、それが実際ですもんね」

山中「はい。実際、そうですよ。これが、次、日本にも来るんですよ。私は来ていると思います」

水島「だからエプスタイン事件っていうのも結構、評判になりましたけど」

山中「はい」

水島「やっぱり、おっしゃるように幼児からね、そういう性的な対象にするようなね、これを合法的にしちゃうっていうねぇ」

山中「はい」

水島「そういうことで結局、何があるかって言うと、我々がいつも言うんだけどもＬＧＢＴ、そのあと行くのは、所謂、同性婚」

山中「はい」

水島「そして夫婦別性。それから日本の戸籍制度の抹消。つまり家庭というもの自体を全部、破壊する、解体する。そして、もっと言うと男とか女であるっていうこと自体も選択制にさせるっていうね」

山中「はい。性の垣根を取り去るっていうのは、今、アメリカがやっていることですね」

水島「だから全部やるって、だから、もう家庭もそうなっちゃうっていうね」

山中「はい」

水島「最終的には、私は皇室の解体っていうのがね、つまり、よく言うんですけど３０万人の縄文人の人達が外へ出ないで、色々外から入って来たけども、そのまま日本列島に住んでいるっていうね。こういった自然国家の流れの中で、家族というのは物凄く大事な形だったんですよね。根本的に移民を入れて文化も何も、つまり日本っていうもの自体を解体するっていうね。皇室が一番、狙われているっていうねぇ。こういう状態になっているっていうのが、何だか凄いなぁと」

山中「恐ろしいですねぇ」

水島「恐ろしい」

山中「えぇ」

水島「それこそ、そういった意味で、さっき言った様に綻びが出始めているって。実際、皆さん、これは別の所からの情報ですけども、もしかしたら、よく言われるディープステートというか、トランプ大統領が言う人達は、もしかしたら炭素の事を止めるかも分かんないって。ちょっと出始めましたね。脱炭素とかね。今迄、それは自分達の支配の為に色々やって来たけども、世界的な大転換になるんですよ。

つまり自分達の支配構造が確立する為には何だってやるっていうねぇ。それで今、グローバルサウスの反抗っていうのは大きいと思いますよねぇ。今、及川さんは、今の話を聞いて、どうですか」

及川「はい。今日のテーマの中で、やはり憲法改正っていうのが非常に大きなテーマの一つだと思うんですよね」

水島「はい」

及川「チャンネル桜は、この件について凄く詳しくとり上げていると思うんですけど、ウクライナ戦争をひとつの契機として日本の憲法に緊急事態条項を入れるべきだっていう話がクローズアップされて、こういうネットでチャンネル桜を観ている人達だとか、山中さんのチャンネルとか私のチャンネルとか観ている人達は、緊急事態条項なんか、とんでもないと思っている方だと思うんですよ」

水島「うん」

及川「ただ、残念ながら少数派ですよね」

水島「そうですね」

及川「少数派で。日本のマスコミの世論調査を見ると、緊急事態条項による憲法改正に賛成の方が圧倒的に多い訳ですよ。反対なんて言っているのは本当に、このぐらいしか居ないですよ。もう、みんな、賛成ですよ。いいじゃないかって言っている訳ですね。その賛成になっていった理由のひとつとして、世界の憲法の中で緊急事態条項が入っていない憲法は無いんだと。入っていない憲法なんか無いんだと」

水島「うん」

及川「日本だけだと」

水島「そういう言い方しますね」

及川「ね。そういう言い方をするんですけど、私はこういう嘘が嫌いなんですよねぇ。何故、こんな嘘をつくんだろうと思って。これは事実ではないです」

水島「うん」

及川「例えば、国会に国会図書館っていうのがあって、国会図書館の調査局っていうところが正直に出していますけど、ＯＥＣＤ加盟国、３８か国ぐらいあると思うんですけど、その内、憲法の中に緊急事態条項が入っている国って７割ぐらいありますよ。あとの３割は入っていないんですよ。だから入っていない国なんか、ひとつもないと言っていながら、入っていない国は、いっぱいあるんです。

例えば、どういう国かって言うと、アメリカは入っていません。イギリスも入っていない。カナダも入っていない。オーストラリアも入っていない。ニュージーランドも入っていない。ベルギーも入っていない。ノルウェーも入っていない。日本は入っていないですよ」

水島「うん」

及川「だから、沢山、あるんですよ」

水島「うん」

及川「何故、世界には、そんな国は無いんだって言うんだろうと思って、これは正確に言うと、何だっけ、国基研？」

水島「うん」

及川「よく知らないんだけど、私は。国家基本問題研究会？」

水島「国家基本問題研究会ですね」

及川「国家ですか。櫻井よしこさんという方が創られたんですか」

水島「うん」

及川「よく知らないんですけど。ここが嘘を言っているんですよ」

水島「そうですね」

及川「はっきり言ってね」

モーガン「意図的に」

及川「意図的にね。西修先生という憲法の偉い先生が居るんですね。駒澤大学だったかな」

水島「うん」

及川「駒澤大学の名誉教授か何かで…」

水島「西さんって居ますね」

及川「えぇ。西修先生が、おっしゃっているんですよ」

水島「うん」

及川「だけど西先生は学者なので嘘は言っていません。西先生が言ったのは、１９９０年代以降の新しい憲法で緊急事態条項が入っていない憲法は、ひとつも無いって言っているんですよ」

水島「１９９０年以降」

及川「以降。１９９０年以降って東ヨーロッパが民主化した時代ですよね」

水島「うん」

及川「だから東ヨーロッパが民主化して、そういう国々が憲法をつくったら、大体、入っているんですよ」

水島「うん」

及川「だけど、その前に出来た国って、いっぱい、ある訳ですよ」

水島「うん」

及川「それが、さっき言った様に合衆国憲法には入っていませんし、イギリスだって入っていない」

水島「うん」

及川「何故、こういう国の憲法に入っていないかって言うと、危険だからですよ。緊急事態条項なんか憲法に入れたら、利用されるに決まっているんだから」

モーガン「そう」

及川「そんなの先進国だったら、みんな、解っているから入れていないんです。入れている国があるとしたらドイツとかイタリアですよ。ドイツとかイタリアの憲法には入っているんです」

水島「うん」

及川「でもねぇ、まぁ、ちょっと、ごめん、こういう国々は何か入れそうだなって分るんですけど、でも普通は入れないんですよ。それを、こうやって１９９０年以降の国ということを言っているんだけど、実際、世界には、どの国も憲法には緊急事態条項が入ってい

るっていうのは嘘じゃないかもしれないけどトリックですよね」

水島「うん」

及川「こうやって国民を洗脳する手法を使うのをグローバリストっていうんですよね。だから国基研だとか日本会議ですか。全くグローバリストの集団じゃないですか」

水島「そうなっちゃいましたね」

及川「保守とか言っていても」

モーガン「その通りです」

及川「ねぇ」

モーガン「おっしゃった通りです」

及川「ねぇ」

モーガン「はい、その通りです」。

及川「グローバリスト、やり方がグローバリストだから」

モーガン「はい」

及川「だから、我々はグローバリストだって、ちゃんと名乗られた方がいいんじゃないかなと。その方がスッキリしますよ」

水島「いや、全くそうだねぇ」

及川「それと、これは名前を出しちゃっていいのかどうか分かんないけど…」

水島「いいですよ、はい」

及川「あぁ、いいですかね（笑）、日本会議の常務理事をされている方で、この緊急事態条項を入れて来た張本人の方がいらっしゃるんですよね。日本政策研究センターっていう保守系のシンクタンクがあるんですよ」

水島「はい」

及川「そこの代表で、え一、伊藤…」

水島「伊藤哲夫さん？」

及川「伊藤哲夫さん、あぁ、昔、このチャンネルにも出たことありましたね」

水島「うん。出ているし…」

及川「ね」

水島「最近は、あまり出ていないけどね」

及川「そうですね」

水島「昔は、よく出ていましたよ」

及川「伊藤哲夫先生は、私も数年前に色々南京大虐殺だとか、従軍慰安婦の事なんかに関して色々教えを戴いて、お世話になった方ですけど、ここが、恐らく憲法改正で九条は、もう無理なので目先を変えて緊急事態条項で、まずは憲法に風穴を開けるべきだっていう提案を出したのは、ここからですね。多分ね」

水島「うん、そうでしょうね」

及川「私は、ここが言っていることに同意できない。ここで作った憲法草案。日本政策研究センターが作った憲法草案と自民党の憲法草案、瓜二つですよ」

水島「うん」

及川「瓜二つです。それから統一教会。統一教会の政治部門の勝共連合。勝共連合が作っている憲法草案と自民党の憲法草案、瓜二つですよ」

水島「うんうん」

及川「じゃあ、これが偶然の一致とは思えないですね」

水島「いや、一致じゃないですよ」

及川「ねぇ」

水島「うん」

及川「だから、この人達は一体、何を狙っているのか。ハッキリ言って、国民主権を無くすことだと思います。国民の自由を無くすことだと思います。これ、グローバリストが一番、望んでいることですよね。だから何処に主権を持ってこうとしているのか何だかよく判らないけど、要は、この国は国民如きに主権がある必要は無いんだと」

モーガン「はいはい」

及川「この国は、もっと偉い方が居るので、だから、この下々の主権なんかは無くていいんだっていう発想が、どうも、この国の保守にはある」

水島「うん」

及川「それを保守と言うんだったら、私は絶対、保守ではないので、日本の保守っていうのは保守でありグローバリストだなという風に思います」

水島「うん。今、丁度、話されたことは私にも関わるので説明すると、例えば伊藤哲夫さんは、もう５年以上、お会いしていないと思うし、出演も無いと思いますけど、安倍さんのね、未だ首相になる前で安倍さんが首相になると決まった時、伊藤哲夫さん、大原康男さんね、それから私、それから八木秀次さん、こういう人達と、安倍さんは今迄の皇統の流れを守るべきだっていう立場だったけども、何故、女系じゃ駄目なのかとか、何故、男系でないと駄目なのかって、その当時は、未だそこまで細かくはご存じなかったので、そういうレクチャーで男系男子を守る意味というお話して、そういうところから色々やっていたんですけども、日本政策研究センターって、一次安倍内閣の本当に完全なリードっていうのかな」

及川「そうですね。ブレーンですね」

水島「ブレーンですね。だから伊藤哲夫さんは、よく官邸へ行って何かしていた。だから、私は、そういう時、一応、これが間違っていたって、あとで思うんだけど、一次内閣、二次内閣で政権を取ったら、私は総理から離れると。そういうことをやっていましたので、あれだったんだけど、そういう人達だった。

それが一次内閣で躓いて、躓いたっていうか、やるだけやったけど病気になったっていう形で、一回、浪人した訳ですよ。浪人中は、また勉強会を安倍さんと一緒にやっていたんだけど、その辺から、ちょっと距離があれになったんだけども、でも依然として日本会議とか、そういうもののリードですね。日本会議のトップの皆さんは昔から保守系の宗教団体という敬虔な人達だったから、そういう何て言うんですか、そういう人達ですから、いや、名前を挙げていいんだけど、ちょっと忘れちゃって…」

及川「伊藤哲夫さんは元々宗教家ですよね」

水島「そうですね。だから、あのねぇ…」

及川「あの生長の家」

水島「あ、そうそう、思い出した。生長の家。生長の家の教祖さんは何ていいましたか」

及川「谷口雅春先生」

水島「あ、そうでした。最近、ちょっと寝不足で思い出せませんでしたけど、谷口雅春さんの影響を受けた人達が日本会議の役員さん達を使って…」

及川「その通りです」

水島「今でも、そうだと思いますけどね」

及川「その通りですね。だから何か変な、変なって言っちゃあ、申し訳ないんだけど、生長の家っていうのは日本神道の新興宗教ですよ。谷口雅春先生の『生命の実装』っていう考え方を、私は、まぁ、いいと思っているんだけど、いいと思うけど、ただ、そこから出て来たお弟子さんである伊藤哲夫さんが何かねぇ、要するに、日本神道の何か極右的な考え方を思いっきり政策にしているとしか、私には見えないんですね」

水島「神道、神の道、はいはい。はい」

及川「日本神道の、正にウルトラ・ナショナリスト的な考え方を政策にして、何が何でも、その政策を憲法に入れたいっていう、そういう活動をやられているように見えて、ちょっとねぇ、この日本国憲法に緊急事態条項を入れるって、さっきのあの嘘を言ってまで、国民を騙しているところからしてカルト的なものを感じるんです」

水島「う～ん、まぁ、勿論、そういう部分がね、そういう背景があるっていうことは、今、私も皆さんに言ったけど、少なくとも我々が付き合っている間は、そういうのを出さなかったけども」

及川「出さないですよね」

水島「でもベースは、そういうものを持っているっていうのはあったと思います。その流れがあるのに、もっと言うと、これは及川さんと少し違うかも分かんないけど、私は逆に徹底していないから良くないっていうね」

及川「うん…」

水島「中途半端に一次内閣で躓かされて、はっきり言うと、あれはアメリカに潰されたんですね。こいつは、もたない、それで、もう一回、奇跡の復活をしたでしょ。あの時のことは、本当によく覚えていますけど、周辺の人達は、安倍さん、出るなって言ったんだから、私は出てくれって直接、言いに行ったら、あぁ、間も無く発表しますからと。その時、安倍さんに対して、この人は中々なものだなと思ったんですよ。

それで当選したんだけども、その影響の中で言うと、彼らがやったことは、アメリカというね、ある意味で言うとアメリカという言い方をしちゃうけど、アメリカの支配層ですけども、こういうものの影響の強さとか恐ろしさとかあって徹底できなくなったって。それこそ私から言えば、ウルトラと言われようと何と言われようと、信念を貫いたらどうだと。お前らは状況によってコロコロ、変わってどうするんだと。

だって皇室の問題まで、彼らは微妙になってきているんですよ。私は日本会議さんに言いたいのはね、普通の真面目な保守を意識した日本会議の人達は沢山、居ますから、その人達を敵にしているつもりは無いんです。ただ、そういう今、言ってくれたような幹部の人達はね、やはり、そこのところをちゃんと考えなきゃいけないと思います。徹底していないんですよ」

及川「社長ね、その徹底していないって、正にその通りで、この憲法改正に関しては、元々伊藤哲夫先生も九条を改正するって言っていた訳ですよね。言っていたんだけど、あるところからコロッと変わって九条はあとでいいと。とにかく最優先は緊急事態条項だと。それまで一言も言っていないのに。だから何か、このねぇ…」

水島「おかしいでしょ」

及川「おかしいと。中途半端なんですよ」

水島「全く、その通りだよ」

及川「それに国民が騙されていると思う」

水島「そうですよ。だから、ああいう人達が言うから信用しちゃうっていうのはあるけど、それから緊急事態条項も、敢えて及川さんに付け加えさせて貰うとね、そういう気持ちと、もう一つは緊急事態って台風が来たり大地震があったり何か色々なところから攻めて来たりするかも分からないから必要なんじゃないっていう素朴な思いで、いいじゃん、っていう感じもあるんですよ。

だから、それは嘘だからね。もっと言うと、さっき言いましたけど、感染症が入っているんですよ」

及川「そう」

水島「我々の国の緊急事態条項には感染症が入っているんです」

及川「うんうん」

水島「感染症が入っているということは、何か病気で流行り出したらインフルエンザだって何だって鳥インフルエンザだって、はい、戒厳令みたいな形でね、それからゼレンスキ

ーみたいに任期が過ぎたって辞めない。選挙をやらない。ずぅっと続ける。だって言論も抑圧するということが起こり得る、誰も、そんな取っ払うことが出来ない、こんな恐ろしい話だから、我々は、そんな、こんなままの緊急事態条項なんて、とんでもないと言っている…」

及川「あぁ、そこ、すみません、じゃあ、その点だけ、ちょっと感染症が入っている点だけ、感染症が入っているんですよ。日本に今回みたいな感染症が流行ったら、国会が開けなくなると。国会議員の人達がかかっちゃうかもしれないので国会が開けなくなるから政府に権限を、緊急事態、集めるべきだと言っているんだけど、いや、別に感染症が流行ったらオンラインでいいんじゃないと思うんですよね」

水島「全くその通り」

及川「別にそんなの、何、言っているの」

水島「出来るんだよ、やろうと思えばできるから」

及川「オンラインで出来るじゃんって」

水島「そう」

及川「何を言っているのかなぁと思って」

水島「いや、そういうね、だから、さっき誤魔化しているって言ったけど、そういうグローバリストのごまかし方ってそういうことですよ。一見、頷いちゃうようなことを言いながら、実は本質的にはやっていることが違うっていうね、そこのところだと思いますけど意見の違う方も居ると思いますけど、どうですか」

山中「僕、及川さんとモーガン先生にね、同じ質問で、じゃあ、今の日本の中の保守だけれども、中にグローバリストに完全に取り込まれちゃっている人達と反グローバリストの我々のように分けられて、これはアメリカでも全く同じような構図じゃありませんか」

モーガン「はい」

水島「まぁ、そうだろうなぁ」

山中「もう保守と言いながら、conservative　まぁ、色々共和党を中心とした昔からの保守、conservative という人達が居て、だけど、こういう人達は何故か大体、上の方に居る共和党のトップの人達は、いつも民主党とズブズブでやっていると言うかね」

モーガン「そうです。ＦＯＸニュースです」

山中「うん、まぁ」

モーガン「はっきり言えば、殆どフェイク・ニュースです。いわゆるフェイク保守です。はい」

山中「そうね。だから、その辺の比較で言うと、凄く解り易いんじゃないかなぁと思ったんで、ちょっとお二人の意見を聞きたいです」

モーガン「恐れ入ります。今、おっしゃった通りですけれども、ご存じの通り６０年ぐらい前、アメリカでは保守の中で内戦がありました。私は John Birch Society が大好きで、

John Birch Societyとは昔から共産主義は恐ろしいと思っている反共の会で、私は前から入会している人間ですけれども、それは本当の保守って言うよりも、それは、ただのアメリカ人。イデオロギーに染まっていない、ただのアメリカ人。ロシアから来た厭な奴がこのアメリカの政府を操っていることをやったっていうことが常識で、イデオロギーとは、ほぼ関係なくて、まぁ、John Birch Societyは、そういうものです。

本当に申し訳ございませんが、政治家達が汚いっていう常識がJohn Birch Societyの基本ではないかと思いますし、私達は、例えば、『National Review』というフェイク保守系の雑誌がございます。『National Review』って日本で言うと、月刊拝米正論ですね。拝米タイムズに近い産経新聞、フェイク保守ですね。まぁ、要はリベラルですけれども、保守を装っている雑誌でウィリアム・バックリー（William F. Buckley Jr.）という詐欺師が長年、その雑誌を担当していて、Conservativeと言いながらリベラルですね。

それがJohn Birch Societyを容赦なく叩いて私達を陰謀論者だと言っていますね。最近、正論がやって居ることと同じです。本当の保守、本当の愛国者は陰謀論者だと。何でもかんでも陰謀論者とレッテルを張って粛清する訳です。正論が同じです。まぁ、フェイク保守です」

水島「うん」

モーガン「National Reviewが何処からお金を貰っているのかとかは判らないんですけれども、所謂、Operation Mockingbird（モッキンバード作戦）がございまして、ＣＩＡが国内でも外国でも、お金をばら撒いて色んな記者とか媒体を買い上げて、日本でもそうだったんですけれども、Operation Mockingbirdの一環で、アメリカのメディアの一部が牛耳られていて、私の考えでは、正論とか月刊拝米、拝米タイムズは日本人が日本人の為に編集しているものではなくて、今、想像されている通りと思いますが、何処かからお金を戴いてワシントン様が注文している記事を編集しているなと思っています。

本当の愛国者は日本でもアメリカでも政府が困ります。本当の愛国者が居ると、政府は困ります。何故かと言うと、本当にごめんなさい。アメリカの政治家殆どが売国奴に決まっています。まず、ワシントンという反米的な所に行きたいっていう人だけでは、まぁ、それは、おかしいと。まず、おかしいです。何故、あそこに行きたいんですか。我々の血税のブラックホールに何故、行きたいんですかと、まず、そこから始まります。

アメリカの政治家は本当にアメリカ人が大嫌い。日本に来て同じ現象が見えています。日本の政治家は本当に日本人が大嫌いです。能登半島をご覧下さい。日本人が死んでいても平気です。いくら死んでいても、これから戦争に巻き込もうとしているフェイク保守、国基研的な人間がいっぱい居ます。これから来る戦争、ワシントン様の為に日本人を死なせたい日本人がいっぱい居る訳です。アメリカも同じで、フェイク保守がメディアを牛耳っています。日本でも、ほぼ同じだと思います」

水島「そうですね。丁度、４月１３日に象徴的だったのは１万数千人の人達が反パンデミックのデモに加わった訳ですけど、朝日新聞から産経新聞まで一切、一行も報道しなかった。内部で大騒ぎして、やっと時事通信が数行だけ配信した。今、モーガンさんが言った様にね、残念だけれども、私も前に言った様に、４～５年前まで１００回に渡って正論っていう雑誌に連載を書いていましたから、あとで聞いたら、いかに水島を追い払うかっていうので、みんなで頭を悩ませていたって言って、１００回目で区切られた（苦笑）、有難

うございましたって言って、追い出された訳じゃないけど、まぁ、そういう風になったんだけど。

つまり、そういう路線の違いが、もう４～５年前ぐらいにはっきり出て来て、やっぱり独立派というか本当に自主憲法制定派とかね、こういう人達は、やっぱり、そうだねって言いながら、実際は煙たがれていって、段々、ウクライナ戦争とか今度のイスラエル戦争とかね、こういう中で、はっきりして来ちゃったから、今、もう産経の姿勢が如実に出ているっていうかね、この産経新聞っていうのは、どういう存在だったかが問われている。残念って言えば残念ですけどね、知り合いも多いですから。ただ本質は、やっぱり、今、おっしゃったところを見ておかなきゃいけないっていうことですよねぇ」

モーガン「産経新聞っていうのは日本人の為に出版されている新聞ではございません。それは、はっきり言えます」

水島「まぁ、ちょっと残念だけど、そういうメディアがそうだっていうことで、はっきりしていると思います」

モーガン「はい」

水島「もう一つ言うと、我々は漁業活動で３６回、尖閣諸島に行っています。私自身は２０回、尖閣迄行きましたけど殆ど報道しない。殆ど報道されたこと無いです。たまたま地方議員の方１０名ぐらいが私と一緒に上陸した時は報じましたけども、あの時だって国会議員十数名、延べで行っているんですよ。何度も行っている人も居るし。地方議員も沢山、行っている。メディアもＡＰやＡＦＰや産経新聞も含めて一緒に行っているんです。

でも、こういう活動はしない。今やそういう状態になっているっていうね、メディアの臆病さというのかね、誰が親分であると、もう飼い慣らされてしまって、ジャーナリストなんて何処に居るんだっていうことを、本当に残念だけど言わざるを得ない状態になっているんでね。ここに居る皆さんは大変、勇気のある皆さんだと思うんですね」

近藤「私も、ちょっと宜しいですか」

水島「はい、どうぞ」

近藤「今、ジェイソン・モーガン先生がおっしゃっていたフェイク保守、似非保守に関して、私も言いたいことがありまして」

水島「はい、どうぞ」

近藤「すみません、及川先生」

及川「いえ、どうぞ」

水島「うん、どんどん言って下さい」

近藤「共同親権に賛成するのが保守のお作法だと言わんばかりの昨今の現状に、私は非常に腹を立てています」

水島「そうですね」

近藤「私は子供を守る立場におりますので、この共同親権に対して子供の目線が一つも入

っていない訳ですね」

水島「はい、そうです」

近藤「今、メディアで保守として有名な、まぁ、名前は敢えて言いませんけれども…」

水島「言って貰ってもいいですよ」

近藤「未だ今日は一応、私のチャンネル桜デビューなので、ちょっと抑え気味に名前は敢えて言いませんけれども、恐らくネットで調べれば色んな自称保守の言論とかジャーナリズムの中で出て来ると思いますけれども、大体、皆さん、共同親権、賛成なんですね。それで、反対だって、私が言いますと、じゃあ、貴方、左なんですかって聞かれるんですね」

水島「うん。それはよく解かる」

近藤「はい。しかし共同親権を数年前に先に言い出したのは左翼なんですね」

水島「うん」

近藤「人権派弁護士」

水島「うん」

近藤「そして離婚したがっている少し生活力の無い女性が無料相談に行きますよね」

水島「うん」

近藤「法律の無料相談に行くと、大体、居るのが人権派弁護士」

水島「うん、そうですね」

近藤「まぁ、左翼ですね」

水島「うん」

近藤「そこで焚きつけられる訳ですよ」

水島「あいつら、商売ですから」

近藤「えぇ。私は以前、３年ぐらい前に、青学の学生から共同親権について、倫子先生は、どう思いますかって聞かれて、私は散々フェイスブックにも書いているので、ご覧になっている方もいらっしゃると思うんですけども、じゃあ、生活力の無い女性が、その弁護士に、どうやって報酬を払うんでしょうかと」

水島「うん」

近藤「そうなった時に親権を持っている者は子供に関する財産、児童手当だとか、あとは、別れた夫から入って来る養育費とか、お金を扱うことが出来るのが親権者ですね。なので、親権をお母さんが持てば、そこから弁護士に報酬が払える訳ですよね」

水島「うん」

近藤「じゃあ、人権派弁護士だってボランティアでやる訳じゃないんだから、っていうこ

とで、離婚したがっている女性達に離婚しなさい、離婚しなさいって吹き込んでいく訳ですよね」

水島「そうですよ」

近藤「ありもしないＤＶをでっちあげるとか、その共同親権に賛成している、所謂、保守と名乗っている人達は、そのＤＶをでっちあげられて、そんなことはしていないのに、勝手に妻が子供を連れて出て行ってしまったと。それで離婚させられたと。会わせて貰えない」

水島「うん」

近藤「こんな可哀想なことってあるかということで、そうだよね、可哀想だよね、お父さん達だって子供に会いたいよね」

水島「うん」

近藤「別れたお父さんに会いたいのは子供の権利だよねという風に子供の権利に寄り添った言い方をして、みんな、共同親権、賛成だって、保守の人が言うんですよ」

水島「はい、はい」

近藤「だけど、これは大変に大きな間違いでして、私は愛国者ですのでヨーロッパから生まれた『権利』という言葉を使うのは普段、あまり好きではないですけれども共通認識の言葉として、最近、便宜上、『権利』って使っていますけど。子供の権利には別れたそれぞれの親と会う権利なんて入っていないですよ」

水島「うん」

近藤「子供の権利は家庭でしっかり育つこと」

水島「うん」

近藤「そして両親と一緒に暮らす事が入っているんですね」

水島「うん」

近藤「では、これを、どう解釈するのか、その法的な法律用語の解釈として考えると、家庭の中で両親と一緒に子供と暮らす権利が子供の権利なんです」

水島「うんうん」

近藤「これを壊してくる男女共同親権っていうのは、私は左翼のやり方だと思っているので、ここまで、しっかり踏み込んで、じゃあ、家庭を、いかにして守るのかっていうところまで考えずに簡単に共同親権、いいじゃないって言っちゃう保守は保守じゃないって、私は思っているんですね。それこそ正に家庭を壊して、その個々人、夫と言うか男、妻と言うか女、娘、息子という子供、それぞれの個々の人権みたいなことを言って家庭をバラバラにしていく」

水島「うん、そうそう」

近藤「これを、まぁ、グローバリストっていう言葉も本当は、私、あまり使いたくないん

ですけれども、まぁ、やっぱりグローバリストの手法の一つだろうなって思います」

水島「そうですよ、これ」

近藤「この共同親権が通った時も、アメリカに言われたから法案化したっていう背景もゼロでは無いと思っているんですね」

水島「うん」

近藤「そうしますとＬＧＢＴ理解増進法だってアメリカに言われたから法令化しましたよね」

水島「そう、エマニュエルさんにしっかり、はい」

近藤「はい。アメリカに言われたから、これを法として通す。こんなバカな話があるかと」

水島「うん」

近藤「それに対して共同親権も同じ手法ですよ。それで保守と名乗っている人達は共同親権が通った、やった、やったぁって旧ツィッター、Ｘでも書いていましたけど笑わせるんじゃないと」

水島「うん」

近藤「フェイスブックで書きました。私の事を視聴者の方がどういう風に認知されているか分かりませんけれども、私はＷｉＬＬでも書いています」

水島「うん」

近藤「ＷｉＬＬでは、このＬＧＢＴ法のことも書いていますし、最近は、毎日、ＷｉＬＬの方には動画で顔を出していますので、私も、ある程度、保守という括りには入っていますが、もしアメリカに言われたから法として通すことが保守であるとか、それこそ正に拝米が保守だというのであれば、私は保守と呼ばれなくてもいいと思っているんですね」

水島「うん」

近藤「はい」

モーガン「同感です」

近藤「私は愛国者です」

モーガン「全く同感です」

近藤「はい」

山中「それでアメリカのＬＧＢＴは、フェミニストってあるじゃないですか」

近藤「はいはい」

山中「昔からあるフェミニスト団体。あれが合体しているんですよ」

近藤「そうですね」

山中「あれが応援しているんですよ」

近藤「そう」

山中「昔からフェミニスト団体っていうのは完全な左派ですからね」

近藤「うん」

水島「いやぁ、そうですね」

山中「こんな単純なアメリカの構図を知らない日本の拝米保守の人達は一体全体、何を考えているんだろうというね」

近藤「そうですね。ジェイソン・モーガン先生の前で、こういうことを言うのは申し訳ないですけど、アメリカには、やっぱりアメリカなりの価値観とか、その文化の成り立ちっていうのがある中で親と子が対立する構図がありますよね。神話から見ていても」

モーガン「はい」

近藤「子供の世代が親と戦って自由を獲得していく。日本にはこういう価値観って無いじゃないですか、折本先生」

折本「(頷く)」

近藤「日本は親から子へ伝承していくのが日本の価値観ですね。それを壊しに来ているのがＬＧＢＴ理解増進法」

水島「いや、そうなんですよ」

モーガン「おっしゃる通りです」

水島「人間の理解がね、やっぱり個々の人権という感覚と、我々の感覚は親から半分ずつ、遺伝子を戴いて全部、繋がっているっていう意識だから、それと、実は、保守系の人達は、近藤さんが今、おっしゃっていたこの問題を本当に何も考えていないんですよ」

近藤「うん」

水島「何、オヤジにもおっかさんにも責任があるんだから、共同親権、いいんじゃないのと」

近藤「もう、そんな感じのところもあります」

水島「そういうような程度です」

近藤「はい」

水島「私もビックリしたんだけどね」

近藤「うん」

水島「私も最初は共同親権で親が責任を持たなきゃいけないからって、初めて、最初の最初に聞いた時はね、親父が逃げちゃう奴、多いから、そういう奴にちゃんと縛りをかける為にというぐらいの感じで入ってみたら、今、そういうお話を聞いて、そんなに簡単なも

のじゃないっていうね」

近藤「はい、そうなんです」

水島「そこですね」

近藤「はい」

水島「今ね」

近藤「日本は元々家族、家庭っていうのを大事にして、ずぅっと二千年以上も歴史を紡いできた国ですから、簡単に家庭を壊しに入るような、例えば、離婚しないように男性も女性も結婚前に、じゃあ自分はどういう家庭を作るのかっていうことを考えておく時間が必要じゃないかと思うんですね。でも離婚ありきで結婚する。共同親権があるから、いつでも離婚できるわというのは凄くアメリカ的な考え方で、ごめんなさい（笑）、もう、これを観ているアメリカに由来のある方には本当に申し訳ないですけれども、非常に欧米的な考え方っていう風に、私は思うので、家庭を壊さないように考える、自分の生き方を考えるとか、そういう家庭をつくっていく。そして子供を育てていくっていうことが非常に大事で、それこそが日本人だと思うんですね」

水島「だからね、それは大袈裟な言い方をすると、縄文時代からね、共同体で子供達が生きているってね」

近藤「はい」

水島「自分は先祖から生まれ、未来へ繋がるみたいなね。その感じで、唯一、教えてくれる場が家庭ですよ」

近藤「はい」

水島「家族ですよね」

近藤「そう、だから母親は、もっと自分を誇りに思っていいと思いますし、今、女性が輝く社会とか言って女を労働力にする。いや、そうではなくて、女は子供を産み育てることの出来るね、男性にはできない、勿論、自称している方にも出来ない唯一の尊い存在だっていうことを、私達、女性が言っていかないといけないなぁっていう風に非常に思っています」

水島「まぁ、何処を見たって何だってね…」

近藤「そうです、そうです」

水島「本当に日本の文化っていうのはそういうとこでね、女性に対して形は法的にどうかはともかく江戸を見たって、実は女性には凄い権力があるんですよ」

近藤「はい、そうですね（笑）」

水島「そこは本当に、ちゃんと勉強してね、今言った共同親権っていうこと自体を簡単に認めないように、これは視聴者の皆さんもねぇ…」

近藤「それ、本当にお願いします」

水島「細かくは、ちょっとフェイスブックとかね」

近藤「あぁ、はい（笑）」

水島「色んなものを見て戴きたいと思いますね」

近藤「はい」

水島「本当に単純ですよ」

近藤「はい」

水島「アイヌ新法も、今言った緊急事態法も、みんな、単純に何も考えずに危ない事が起きたら必要なんだからいいだろうとかね」

近藤「うん」

水島「今、言ったように両方共、責任を持たなきゃいけないから共同親権でいいだろうとかね、この程度しか無いから具体的な例をフォローしていないんですよ、人間のね」

近藤「うんうん」

水島「それぞれの生き方とか人生があるっていうねぇ、そこを大事にしていないというねぇ」

近藤「そう。もう個人の人生、個人の権利ばかりでは駄目ですね」

水島「貴方が言った、そっくりなやつを、現実に見たことがあります」

近藤「あぁ、そうですか」

水島「さらって行くんですよ」

近藤「うん」

水島「左翼弁護士に勧められて、それと暴力をふるって、という形もあって、暴力をふるってないのにということもね、だからお互いに色々あってね、個々にちゃんと見なきゃいけないっていうね」

近藤「例えば、私と山中先生が夫婦だとしましょう」

水島「うんうん」

近藤「今ね。こうしただけでも暴力ですよ。この場合はね、私がＤＶをふるったっていうことになるんですけど、これを、もし、こっそり撮っていたらＤＶの証拠としてデッチ上げられてということになっちゃっていますね」

山中「なるほどねぇ」

水島「それは、たまらんね」

近藤「すみません、本当に」

山中「最近、アメリカは完全にそうなっちゃっていますから」

水島「う一ん、何だか腫れものを触るように生きなきゃいけないというねぇ（笑）、肩を叩いただけでセクハラとか言われる可能性があるからね」

近藤「はい」

水島「というようなことで、今、近藤さんのお話がありましたが、今、こっちの方に行ったけど前に戻ってもいいんですけど。折本さんはどうですか」

折本「はい。そうですね、まぁ、一言で言うと、保守とは何なのかっていう、まぁ、要は何を保守するのかっていう、これは憲法改正の問題、正にそこに尽きると思いまして…」

水島「うん、そこに問われているしねぇ」

折本「本来、その保守っていうのは何をするのかと言うと、やっぱり国体を守るっていう、国体を保守するっていうところ、まぁ、ナショナル・コンスティチューションだと思います」

水島「うん」

折本「ただ、やっぱり戦後の保守っていうのは、まぁ、言うなら資本主義を守るとか…」

一同「うん」

折本「アメリカの自由と民主主義を守るというところの保守になってしまっていると思うんですね。今回の憲法改正にしても、勿論、加憲だとか、僕は本当に恥の上塗りだという風に思っているんですけど」

水島「うん、そうです」

折本「やっぱり、こういう憲法改正の論議をする上で一番の原点は、その憲法とは何なのかと。これは、よく政体と国体という言葉がありますけども、例えば憲法っていう法律であるとか、あとは政府機関、統治機構ですね。そういうものというのは政体であって、その根底にある、やはり、そういう固有の国柄、精神的な価値、そういう国体を守る為の、やはり、その政体であり、それを規定する憲法だという、やはり原点に立ち返らなければいけないと思うんですね」

水島「はい、その通りだね」

折本「大日本帝国憲法の時には伊藤博文とかが留学して、それこそ、どういう憲法をつくるのかっていうんで、それこそ鬱みたいな状態になっていた時に、ドイツ、オーストリアですかねぇ、その歴史法学っていうのに出会って、シュタイン博士ですかね、そういう人達と出会って、要は、西洋の猿真似をしなくてもいいんだよと。憲法っていうのは歴史を映し出す、この国体を映し出す鏡なんだと。だから日本の国体は何なのかということを、しっかりと突き詰めて、それを憲法にすればいいんだというアドバイスを受けて、それで、師匠を得たる心持ちだということで安堵して日本に帰って、井上毅とかと一緒に憲法をつくったと。

その一つのベースになった理念っていうのが正にシラスっていう概念であって、西洋とか支那のウシハクっていう正に国民を家畜と見なすという、或いは君主の私的所有物と見なすような、そういう統治に対して、日本はシラスの精神だと、陛下が国民の心を知らし

て、そういう一君万民の、或いは、君民一体の政を行っていくんだというところで、そのシラス、万世一系の天皇を、当初はシラスという風に書かれていた訳ですね。

なので、やっぱり、その憲法の根幹に日本の国体というものが宿っているということですけども、残念ながら今の憲法は、そこは完全に抜け落ちてしまっているというところで、むしろ、自由と民主主義という価値観を守る為の憲法になってしまっていると。やっぱり、ここに対する反省の目を持たなければ、いかなる憲法論議も一切、意味を成さないという風に思っております」

水島「そこはねぇ、本当に少数意見になっているんだけど…」

折本「はい、はい」

水島「折本さんのお考えと似ているかも分からないけども、国家主権とか国民主権ってあるじゃないですか」

折本「はい」

水島「今、皇室に対して色んな誹謗中傷が行われているけれども、これ、自分達で決められると思っているんですよ。これはねぇ、色々聞かなきゃいけないと思うけど、国民主権っていう言葉は、私が聞く限り各国の憲法には、あまり書かれているのが少ないって。私は天皇主権っていう必要も無いと思うけども、それを言う必要が無いと思っているのね。今、言った様に国柄って言うか国体の在り方を考えた時、天皇っていうのは２６００年ぐらい続いてきた一つの象徴でね、今、現に生きておられる陛下も、そのひとつの繋がりとして今、顕現されているということなので、そこはね、しっかり、やらなきゃいけない」

折本「うん」

水島「我々の国は今、生きている国民の扱うことが出来るだけの、そんな小さな国ではないのだっていうね。つまり、えらい長い過去から、ずぅっとやった先祖達の祈りや希望、幸せや色んなものが全部、集積して、ここまで来ているっていうね。その感覚。チェスタトンの、あの『墓の下の民主主義』ですか、あれ、どっちだったか忘れちゃったけど、今、こういう流れ、所謂、保守の流れっていうのは、我々の国はそうだって、家族もそうだしね。

だから日本のその民主主義っていうのは『大御宝』あの神武天皇の国の宝は国の民だよというね、これって何処の西洋よりも遥かに、さっき言った支配者とかね、そうじゃないということをやっているんで、ここまで本当は、みんなで、もう一回、あの明治の大日本帝国憲法の改定とかいうのも含めてねぇ、やっぱり、みんなで、これは、じっくり考えるべき話でね、ここまでズルズル延びちゃったんだから、もう腹を据えて、我々の国の憲法をやるとしたら、あれは及川さんだったかな、十七条の憲法があるじゃないかって言ったのは」

及川「あぁ、はいはい」

水島「そうですね。本当にそうなんだ。憲法は何の為にあるかっていう根本のところから、もう一回、考えるようにしないと、今のお馬鹿な国会議員や売国奴ばっかりの政治家なんかに、勝手にあぁだこうだと決められちゃったら、たまらんというねぇ。それは先祖に申し訳ないと。靖国神社の英霊にも申し訳ないっていう気がするんですね。これは一

言、言っておかなきゃいけないですね。

前も及川さんとの対談番組で憲法の話をしてね、元々、十七条の憲法があるじゃないかというようなこと、それは、私も確かにそうだと思うしねぇ。だから、そういうところから振り返って、我々の国の在り方を考える出発点にしなきゃいけないっていう気はするんですね。

これも憲法の問題は色んな意見があっていいと思うんですけど、岡さん、どうですか、この憲法問題で今日は討論するつもりは無いけどね。色々な考えがそれぞれあると思いますけど」

岡「結局、日本は別に憲法が無くても、みんな、各自が常識の範囲の中でね、ある程度は、道徳観を持って動ける民族だと思うんですよ。それをね、いちいち、これは法律に書いてあるからとか書いてないからとかね、そういうことで、いちいち法律を持ち出して来なくても、日本人は充分、大丈夫な民族だし…」

水島「だと思いますね」

岡「だからイギリスの法律で、特に憲法って無いって言うじゃないですか。成文憲法はね」

水島「うん」

岡「だから、それは慣習の中に沁みついた、私達の常識っていうものがあって」

水島「常識ね」

岡「うん。だから、例えば家庭っていうのは、こういうもんだよねという長い間の蓄積みたいなのがある訳ですよね。だから、それはアメリカみたいな歴史の浅いって言ったら失礼だけど、そういう国とは全然、年月が違う訳ですよね」

水島「うん」

岡「だから別に、これを書かなきゃとか、そういうことで揉めなくても、本当にざっくりとしたものだけで充分じゃないかなと思うんですけどね」

水島「なるほどね」

近藤「やっぱり欧米って明文化したがるじゃないですか」

水島「そうだよね」

近藤「あれって言葉として残しておかないと、みんなが、それに従えないから明文化したがると思うんですよね」

水島「そうだよね」

近藤「あっ、あ、すみません、ちょっと…（苦笑）」

水島「でも、それは、よく論語で言うじゃないですか、中国の人は孔子の言う通りに出来ないから言葉にしているっていうね」

近藤「う～ん」

水島「日本人は元々実践しているよっていうね」

近藤「そう、だから今、岡先生がおっしゃったように、もう沁み付いているものが日本人にありますから」

水島「そうですねぇ」

近藤「うん、だから本当に十七条の憲法でいいんじゃないかっていうのは、私も思いますね」

山中「アメリカと比較すると、アメリカって、あれだけ人種の坩堝で、世界中から集まって創っている国だから、でもアメリカ人が、やっぱり保守の人が一番、よりどころになるのはアメリカのUS Constitutionですよね」

水島「うん」

山中「だから、そこにしっかりと根付いていれば、そこに、しっかりとついている人達は、やはりアメリカの中の保守って、これ、外れないんですが、しかし、そういうものが無いと、今、おっしゃったように、やっぱり纏まれない国。あれだけ外国人が集まっちゃうとね。

だけど、日本は、ほぼ単一民族で２０００年以上、縄文から言えば、もう５千年、１万年、それだけの長い歴史があるから、ただ惜しむばかりか、残念にも戦後、相当な欧米化でね、ここ何十年もガンガン精神的な攻撃を受けてしまっているので、ぶっ壊されてきちゃっているんですね。だから、我々は、ここへの何らかのあれをしないと。今のところは未だ未だいいと思うんですよ。

でも、あそこまで細かく法律でやらなくても、日本っていうのは、それなりに来ているし、今後も暫くいいと思うんですが、非常に僕としては危惧というか懸念を持っているんですよ」

水島「そうですね」

山中「えぇ」

水島「立憲主義っていうのは、よく立憲民主党がね、暴走をチェックする為の立憲なんだという言い方をするけども、今、山中さんがおっしゃったことでＬＧＢＴとか、そういう作る必要も無いものを作っていくっていうね、それと、もう一つは、まぁ、これも及川さんと話したことだけど、人間は原罪を持っている、必ず悪い事するもんだっていうね、それで罪と罰を与えないと、我々は間違ってしまうっていう考え方と、穢れを取れば、人間本来の姿になるみたいなね、神道とか仏教的な考え方とか、また、これも日本人の縄文から持って来た自然観っていうのがあるんでねぇ、だから、私は十七条憲法から、もう一回、明治の帝国憲法まで含めて検討して、本当に我々の国はどんな国になりたいんだ、したいんだ、あるべきなのかっていうのをやるべきだと思うんですけど、及川さんが十七条を言ったのも、それなんだよね」

及川「そうですね。今、岡さんの言われた通りだと、私も思います。日本人の持っている素晴らしさっていうのは常識であるとか、そもそも持っている社会性であるとか、もう、

これは我々の誇るべきものであって…」

水島「うん。そうだね」

及川「震災の時とかに、それが表れていて、世界中がそれを見て尊敬している訳じゃないですか」

水島「う～ん」

及川「だから憲法に更に加えて、あれもこれもとかって言ってやる必要が一体、何処にあるのかって、私もそう思うんですよ」

水島「うん」

及川「ただ、この話は、やっぱり憲法九条をどうにかしなきゃいけないんじゃないかって、そこから始まった話なので、そこを、ちゃんと議論すべきであって、その議論をやめちゃって何か訳の分からないものを、いくつか持って来て、この姿勢が日本人らしくないですね」

水島「いや、全くそうだよねぇ。本質を忘れてね」

及川「(頷く)」

水島「ここに傷があるから、ちょっと何か塗っておこうとかね、そういう弥縫策っていう感じだよね」

及川「それと聖徳太子の十七条の憲法は、憲法っていう日本語を使っている訳ですね。明治政府がConstitutionっていう海外の先進国、一等国がみんな持っているものを日本も持たなきゃいけないと」

水島「うん、うんうん」

及川「そのConstitutionに憲法っていう翻訳をした訳ですよ」

水島「うん」

及川「これは世紀の誤訳だと思います。全然、違うから。だって日本は、とっくに持っていた訳ですよ」

水島「うん」

及川「十七条憲法っていうものと、それと欧米のConstitutionは全然違うので、十七条しか無くていいんですよ」

水島「うん」

及川「あとは法律で決めればいい。だけど、でも合衆国憲法であろうと、何処であろうと、みんな、Constitutionっていうのは１００条ぐらいある訳ですよ」

水島「うん」

及川「そうしたら、つまり、今、議論があったように憲法が細かく規定している訳ですよ」

水島「うん」

及川「でも、これと聖徳太子が創った憲法っていう言葉と違う。絶対に違う」

水島「うん」

及川「それを一緒にしたこと自体、私からすれば明治政府は間違っていると」

水島「うん。そうだねぇ。やっぱり、これも、また彼と話したことだけど、皇室の中にあった仏教と儒教の部分が全部、消されちゃったんですよ。明治の帝国憲法はね。それと西洋の近代的なものを持ち込んで、だから聖徳大使の場合、敬虔な仏教徒だったから神道と仏教を共にというものがあって、極めて日本的なありとあらゆるいいものを、みんな、自分の中に取り込んでやって行こうっていうことがあったと思うので、今の及川さんがおっしゃったように、そのあたりからやらなきゃいけないし、九条二項だよね。結局、それさえも議論しないでねぇ、今、いい加減にやっちゃおう、でっち上げちゃおうっていうねぇ。それと近藤さんだから知っていると思いますけど…」

近藤「はい」

水島「靖国神社の遊就館の特攻隊員の残した遺文とか遺書とか遺志とかね、色々あるけど、９０％以上、お母さんですよね」

近藤「はい、そうですね」

水島「すげえなぁと」

近藤「うん」

水島「これは日本のお母さん達の凄さ」

近藤「うん」

水島「子供達がお母さんに親孝行しないまま死ぬのがつらいけど、それでも行きますっていうね」

近藤「はい。そう」

水島「こういうこととか、そういう日本の女性の偉大さっていうのがね…」

近藤「本当にそうです」

水島「戦争がいい悪いっていうのは色んな意見があると思いますけども、ああいう中でね、日本の母は凄く偉大だったっていうことは、やっぱり指摘しなきゃいけないし、それから、もう一つ、え一、何とかの面影って、渡辺…ちょっと、今、名前が出なくて良くないんだけど…」

折本「『逝きし世の面影』」

水島「そうそう」

近藤「あぁ、渡辺恭二さんですね。はい」

水島「あの中で外国人が江戸の末期に来てね、世界一、子供を可愛がる国だって…」

近藤「本当に子供の楽園って書いて」

水島「ね」

近藤「はい。ここにはルソーの子育て観が、もう日本には、ばっちり表れているって言って、西洋の方々が驚いたって記述が沢山、あるんですよ」

水島「だから自信を持って、本当に昔からの、それこそ聖徳太子の時代からの、我々の歴史を考えれば、そんな間違ったことは…、国としてあると思うんですけど、岡さん、どうですか」

岡「そうですよね」

水島「まぁ、みんなで」

岡「まぁ、いい、あ、どうぞ」

水島「うん、この憲法問題は、もし何かあれば言って戴いて、付け加えることがあれば。これを議論すると、本当に５時間でも６時間でも出来ちゃう話でね（苦笑）」

一同「（笑）」

折本「まぁ、でも、いいですか」

水島「はい、どうぞ」

折本「結構、この何て言うんですかね、憲法っていう形で態々、そういう明文化する必要があるのかというのは、古くからあるテーマであると思うんですけど」

水島「うん」

折本「例えば、『葦原の瑞穂の国は神ながら、言挙げせぬ国』と本居宣長が言っている訳ですけど、一方で、まぁ、僕は水戸学とかを勉強していまして、藤田東湖が書いた弘道館記述義を読みますと、その弘道館っていうのは、道を広める館と書く訳で、その道とは何ぞやっていう事を論じている訳ですね」

水島「うん」

折本「古来、我が国には儒教が伝来する前から、そういう固有の道があったと。だから誰も、そういうことに気づかずして、その道を踏み行って来たので、その存在すら、意識していなかったし名前すら無かったと。ただ、それが、まず儒教が入って来て、そして仏教が入って来てというような形で外来思想が入って来る中で、結局、その一つの日本の場合は、仏教とかも日本的に受容していった訳ですけども、外来思想として来る時のひとつの侵略思想として来る訳ですね。

それに対して日本の道とは何なのかということを論ぜざるを得なくなったと。そこで神道という言葉が生まれたんだという風に言っている訳ですね。勿論、その道徳として、国民が、普通に踏み行っているのであれば、敢えて名前を付けたり明文化する必要は無いと思いますけれども、これだけ西洋を始め外来思想が入って来て、ひとつの思想侵略ですよね。それに対抗していく為には、国体とは何ぞやということを敢えて議論しなければいけないし、それを、やはり憲法の上に於いても明文化していくっていう必要というのはある

んではないかなということ、それは私の考えです」

水島「まぁ、でも、それは、その通りだと思いますね」

折本「はい」

水島「私なんかも、そこが一番、テーマになっていて、今、生きている為のハウツーの憲法じゃ駄目だ。我々の国の本質、これは禅ですけども、私は時間だと思っているんですね。生きて死んでいくのは全員確実にそうだけど、そういう時間っていうものを、ちゃんと体感している民族っていうのは、我々の国以外に中々居ないっていうね。

今を生きて空間の拡大や充実は、みんな、目指すんですよ。それはマルコポーロとかヴァスコ・ダ・ガマにしろ、今、宇宙の月まで行くとかいうのはあるけども、でも、我々の中で、狭い一方丈でも宇宙を感じられるっていうのは時間だと思っているんですよね。だから基礎に置いているのは空間性であるか時間性であるかっていう感覚が、やっぱり特攻隊員の気持ちが解かるか解らないかの感覚だと思ってね、その『道』っていうのも具体的なハウツーのやり方じゃなくて、その過程の中こそ、それがあるっていうような感じの、ちょっと難しい言い方になっちゃうけど、そういう感覚があって、やはり日本を、もう一回、考え直すいい機会じゃないかなぁと、実は思っていた。

アメリカも、みんな、そうだしね、モーガンさんや、今、山中さんもおっしゃって戴いた、アメリカの崩壊。でもねぇ、今の現代人は、正直言って、これから後半なので、先に言っておくと、今の現代人はアメリカの崩壊と、全部、連動しているんじゃないか、むしろ先走って、こういう人達のようにね」

モーガン「そうです」

水島「崩壊とか破滅へ、我々が先に扇動しているというようなことがあるので、後半の１時間ぐらいは生々しい話でもいいですから（笑）、色々な事で議論してみたいと思います。一回、お休みします」

一同「（礼）」

＜後半＞

水島「はい、後半になりました。後半は、さっき言いましたように、直近の、まぁ、今から、１１月のアメリカの大統領選挙、そしてイスラエルの昨日も３５人だか４０人ぐらいやって、さすがにイスラエルも間違いだったみたいなことを、ネタニヤフさんが言っているっていう、はっきり言うと、ジェノサイド的なものが続いちゃっているっていうね。まぁジェノサイドと言ってもいいんじゃないかっていう感じがイスラエルでも続いている。

それから、また非常に複雑なウクライナですね。ゼレンスキー大統領が妙に優しい四原則っていうのを出して和平案を言い出している。ところが周りは応援するぞ、応援するぞとイギリスやポーランドは兵も出してもいい、フランスも指導員を派遣するって、もう、や

っているくせに、そう言ったりする訳ですね。こういう状況の中で、今、日本が置かれている。

先程、何方か言ってくれましたけど、食糧もエネルギーも全く自立する意図が無い。正に、昔の植民地の、例えばゴムならゴムとかバナナならバナナとか、こういう売れる商品を外国に向けてやっていればいいんだみたいなね。米も作るつもりがない。私は北海道によく行くんですけど、みんな、言いますけど、本当に数年以内に酪農業は全部、全滅するっていう、つい、１０年前ぐらいですか、余市というワイン業者が、やっと白ワインだけはヨーロッパ並みに追いついたと。これから赤ワインもヨーロッパの水準と引けを取らないものが出来ているとか言っていたんですけど、こういう努力が全部、ぶち壊されていくっていうね。それでニセコっていうのは今、９０％、中国人が買っているっていうね。それでラーメン一杯３千円（失笑）、定食が１万円っていうねぇ、本当に日本人は入れないですよ。

そういったチャイナタウンとか、こういうことが現実的に出来ちゃっている。外国人の土地規制に対する土地取得規制、これも公明党が反対したんですけども、中途半端にこういうことで駄目になったっていうね、もう悉く、今、日本がそういう状態になって、もしかしたら、でも選挙が行われるか分からない。こういう状態になって居ます。

こういう中で、まず日本の状況が非常に表れているっていうのは、東京都の都知事選も間も無く６月２０日からやるっていうんですけど、物凄い数の人達が立つことを表明していますけども、ちょっと生々しい話ですが今年１年、皆さん、どんな感じで思っているか、カオスとか色んな表現があると思いますけど、予想がつかないとか色んなものがあると思います。少なくとも善い事を中々予想できない状態じゃないかなぁと思うんですけど、今回はそちらからね、今年に限って、大統領選とか台湾問題を含めて、どんな見方をしているか、ご意見を伺いたいと思います」

折本「はい。国際情勢っていう点で…」

水島「はい、国際情勢も国内情勢でも構いません」

折本「はい。ああ、そうですね」

水島「連動していますから」

折本「やはり当面の関心事というのは、今、おっしゃった都知事選かなぁと思います」

水島「はい」

折本「やっぱり国政が、ここまで行き詰っている状況の中にあっては、やはり地方政治ですね。そこから、やはり攻めていくしかないなぁと私も思っています。だから地方議員をやらせて貰っているというのもありますけども、やっぱり国政って言っても、先程、申し上げたように重要広範議案についても、ちゃんと真摯な議論がされていないですね」

水島「いないですねぇ」

折本「それについてメディアも報道していないですし、国民も無関心だしと。一部の人間達が閣議決定で決めた法案が殆ど議論されないで通ってしまっているような状況の中にあって、やはり政党政治そのものが機能しなくなっているということだと思います。私も無

所属で当選させて貰いましたけども、そういった中でも既成の政党に対して、要は見切りを付けている国民が相当、居る中にあって、まぁ、そうは言っても国政選挙では、無所属だと中々勝てないという現状がある。ただ、やはり地方政治だと、例えば、私の県議会選挙なんかは、浦安市が選挙区で中選挙区ですので、浦安市から二人とか他の自治体でも大きい所だと５人とか６人とか出られるので、そういう主場で堂々と大義を掲げて闘っても、勝てなくはない選挙だと思います。

だから、そういった中で、やっぱり地方自治体の中から国を立て直していくっていうことが重要だと思いますし、やっぱり首長ですね。予算を扱う首長を誰にするのかっていうのは、大変、重要だと思っています」

水島「そうですね」

折本「やっぱり、それこそ話が婉曲になるかもしれませんけども、対グローバリズムであるとか、私は、その根底には対米従属の問題があると思っているんですけども、その対米従属の根幹を成しているのが、例えば、今の日米安保だとか日米地位協定。地方政治と、私は、決して、何て言うんですかねぇ、まぁ、別の問題ではないと。一体、不可分の問題だと思っていまして、って言うのも、例えば、東京都知事選挙に関して言うと、東京都の中に、例えば横田米軍基地だとか、あとは赤坂米軍センターとか、まぁ、そういう米軍施設が今も沢山、残っている訳です」

水島「そうですね」

折本「だから、それに対して、やはり首長とか議会から、例えば、横田基地の返還を求めていくとか、これは、ひとつの主権回復の戦いだと思うんですね」

水島「うんうん」

折本「そういう声を上げていかなければいけない。もうハッキリ言って、今のそういう国政の状況を見ていると難しいんじゃないかなぁと。もう無理なんじゃないかなぁとすら思えて来ています」

水島「そうですねぇ」

折本「ですから、そういう真面な人間が都知事になって、それで、そういう地方から主権を取り戻していくという意味に於いては、この都知事選挙っていうのは非常に重要なのかなと。そういう議論を、私からも提起していきたいなぁという風に思っています。はい。国際情勢については、そうですね、私もそんなに詳しくないんですけども、やはりアメリカの大統領選挙の行方っていうのは非常に大きいかなぁという風に思っています。

やっぱりトランプさんも色々賛否ありますけども、ただ、やはりアメリカの共和党の中でも、所謂、ネオコン勢力みたいなものが駆逐されて、そういうナショナリスト政党に替わりつつあるのかなぁという期待を持っていますので、そういった中で日本がトランプになって、そういう独立をするという、また千載一遇のチャンスが訪れるんではないかなという気がします。それに期待を寄せているといったところですかね。以上です」

水島「はい。モーガンさん、いかがですか」

モーガン「はい、有難うございます。先程、折本先生がおっしゃっていた対米従属ですけ

れども、私は、この１年間で日本国内での情報統制、情報戦が益々激しくなって、一方、そういった中、国民が目覚めると、私は期待しております。チャンネル桜が方策している成果でもありますが、グローバリズムに対する危険だと思っている方々は、今、確実に人数が増えていると思っています」

水島「うん」

モーガン「その勢いが益々強くなるんじゃないかと思っていて、もう戦争が始まっていると冒頭で申し上げたんですけれど、正にその通りで、日本人が今、戦争の中に生きています。暮らしています」

水島「うん」

モーガン「気づいていない人は多いんですけれども、気づいている人の人数が増えていますので、もう、これからの１年は期待したいと思っています」

水島「うん」

モーガン「一方、人が物事を分かるようになったらグローバリストの情報戦がもっと激しくなりますので、覚悟が必要と思っております」

水島「はい、そうですね」

モーガン「はい、以上です」

水島「はい。有難うございます。近藤さん、どうですか」

近藤「はい。有難うございます。私は今年と言うか、先月、賑わせた東京１５区に住んでいます」

水島「あぁ、１５区でね」

近藤「えぇ、江東区民ですので、まぁ、私は非常に冷静に分析しながら見ておりました。でも、さっき折本先生もおっしゃったように、これから都知事選がありますけれども、やはり、その国政を考えた時に、その地方からっていうのは、私も非常に思いますので、まずは東京都が、しっかりと小池さんではなく、本当に都民と都政と向き合ってくれる都知事を選ぶことが大事っていうのが政治的な考え方かなと思います。私は、もう再三、言っていますけど、やはり家庭からもう一度、日本を立て直していきたいという思いを凄く持っていて、それは、本当に建国の詔、神武天皇の建国の詔にある八紘一宇ですね。あれは正に家庭と国の関係性を表していますので、お母さん達にメッセージを伝えていきたいなぁと思っています」

水島「そうですね」

近藤「今年一年は、本当に、今日のテーマも『大転換』という風になっていますけれども、今後、日本がどうなっていくのかっていうのは、私はそろそろ時間が無いんじゃないかなぁっていう風にも思っています。子供の出生数の問題もありますし、若い世代が中々結婚に踏み切れない経済的な問題もありますし、色んな方にメッセージを伝えていけるように、私も頑張っていきますし、皆さんも是非、それこそ折本先生がおっしゃっていましたけど、国体とは何か、日本とは何かという日本というところに立脚して、色々と物事を

見極めていける人が増えてくれることを願っています」

水島「なるほどね」

近藤「はい」

水島「はい、有難うございます。及川さん、お願いします」

及川「はい。今後を見渡した時、私は、やっぱり国際情勢の中でイスラエル・ハマス戦争っていうのが、どうなるかっていうのが、やっぱり世界中で一番の注目ではないかと思うんですね。私はイスラエルという名前がついた、この今の戦争に非常に不気味なものを感じておりまして、例えば、ネタニヤフ政権が明らかにやり過ぎていて、ガザ地区のパレスチナ人が、どんどん南に追いやられ、今、ラファという地区に百何十万人も居て、そこに又、攻撃して来るっていう、そこまでやるっていうことに対して、国際社会は、もう完全にＮＯな訳ですよね。

それはアメリカ国内の国民も一緒で、アメリカ国民が、かつて無いぐらい反ユダヤになって来ている。そんな中でバイデンが、これまで、ずっとネタニヤフに寄り添っていて、イスラエルに武器を送っていた訳ですよね。ＩＤＦってイスラエル国防軍が使っていた武器、みんなアメリカから送ってくる武器を、そのまま使っているだけで、でも、その武器を一時、止めたんですよね。あまりにも世論の反対が強いので。

このままで行ったら、この件で自分が秋の大統領選挙で負けちゃうので、止めたら、そうしたらアメリカの下院議会がイスラエル武器支援法案とかっていうのを可決するんですよ。先々週か何か」

水島「はい」

及川「アメリカの下院議会って共和党ですよ。共和党はバイデンのイスラエル支援が弱気になって来たので何をやっているんだと。イスラエルを支援しなさいと。武器を送りなさいと。そういうバイデンの何か後ろから押す法案を可決するんですよね。共和党が出してね」

モーガン「共和党は卑怯者ばっかりですよ」

及川「ねぇ。でしょう」

モーガン「そう、そうですよ。はい」

及川「そうでしょ（笑）。だからね、さっき前半、山中さんがアメリカの保守とグローバリズムと言ったんですけど、私はアメリカに保守なんか居るのかなって思ったんだけど」

モーガン「私ぐらいです」

一同「（笑）」

及川「あぁ、そう、ここに一人居た（笑）」

一同「（笑）」

及川「でもワシントンには居ないんじゃない」

モーガン「ゼロ人です」

及川「ゼロでしょ」

モーガン「ゼロです」

一同「(笑)」

及川「だからね、日本の保守の言論人が、アメリカには共和党っていう立派な保守の政党があって、ここが素晴らしいんだ、トランプさん、応援しているんだって、これ、全然、違いますよね。共和党は今や、バイデン以上にイスラエルを応援している訳ですよ。バイデン以上に武器を送っているんですよ。その武器でパレスチナの子供達とか殺されているんですよね。この現実は一体、何なのかっていうと、私はバイデンだけじゃなくて、共和党の議員達もイスラエル・ロビイから金を貰っているって勿論、あるんですよね。

あるんだけど、それだけじゃなくて、その不気味だって言ったのは、やっぱり彼らのバックにある福音派キリスト教っていう宗教ですね」

水島「うん」

及川「要するにアメリカのキリスト教、福音派と言われる方々はクリスチャンだけど、イスラエルに対して特別な思いを持っている」

水島「そうですね」

及川「それはイスラエルが神の国であって、イスラエルで神の権利っていう神権政治っていうのがイスラエルで行われるんだと。だからイスラエルは、クリスチャンも応援しなきゃいけないんだと。パレスチナから土地を奪って、そこにイスラエルという神の国が出来て、そこに、どうもイエスが再臨するとかっていう話ですよね。だから、彼らは真剣ですよ」

水島「うん」

及川「マジでイスラエルを応援している訳ですよ。この宗教的な、ハッキリ言って間違った宗教的な理念が、こういうところに入って来ると怖いですね。このまま、どんどん武器を送りますよ。このまま行ってしまうと思う。こういうのが今、起きているっていうところを、私は国際政治には必ずバックに宗教的な理念があるので、宗教的な理念っていうのは簡単に変わらないです。議論では変わらない」

水島「うん」

及川「もう信念ですから、信仰です。これ、ちょっと解り難いと思うんですけど、神の御心がイスラエルという国に於いて、政治的に軍事的に強い国として実現するんだと」

水島「うん」

及川「これが神の御心だ、そこにイエスが出て来るんだって、こんなこと聖書の何処にも書いていないですよ」

水島「だからシオニストのあれとは違うね」

及川「そう。クリスチャンのシオニスト」

水島「それが凄く大事ですよね」

及川「そう。アメリカにクリスチャン・シオニストが居るんですよ」

水島「はい、そうなんです」

及川「イスラエルは、それを利用しているんですよね」

水島「うん」

及川「味方に付けた訳ですよ。だから金だけじゃないんです」

水島「うん。うん」

及川「ここを狙って来ているというね、私は宗教者の一人として、この不気味さを感じます」

水島「うん」

及川「アメリカのクリスチャン、聖書の何処にも書いてないことを信じていませんかと」

水島「所謂、福音派、或いは、再臨派みたいなことですね」

及川「そうです。福音派っていうのは聖書に忠実なクリスチャンの事を言うんですよね」

水島「うん」

及川「だけど、全然、書いて無いことを信じていませんかと」

水島「そう、旧約の都合のいいところと言っちゃあ、失礼だけどね」

及川「そうです」

水島「そういうことですよね。それを付け加えているっていうかね」

及川「そうだと思います」

水島「それも、でもねぇ、及川さん、トランプを支持した…」

及川「そうなんです」

水島「中心団体ですねぇ」

及川「そう」

水島「う～ん」

及川「そうです。トランプさんはその福音派のクリスチャンに支えられている訳で、まぁ、それだけじゃないんでしょうけどね」

水島「うん」

及川「まぁ、そういう複雑なところがあります。私はトランプさんを支持しています」

水島「うん」

及川「トランプさんに勝って貰いたいと思う。ただ、そのバックに居る人達は、どうなのかなっていうのを、正直、感じています」

水島「そうだね。だから、そこの部分をちゃんと踏まえておかないという気がするのと、これも、また広げてみたいと思いますけど、山中さんはどうですか」

山中「はい。今の及川さんの見方は、実は、私もかなり非常に近い同じような見方をしている訳ですが、ただ及川さんの見方は、やはり宗教者というだけあって、多分、普通の日本人の人だと、この考え方は出て来ないんですよ。分からないから」

水島「うん」

山中「だから２０１６年に一番大きな、或いは、その２０１０年代とか共和党が物凄く大きくなった時っていうのは確かに福音派が物凄い大きな力を出して、そして、ひっくり返していったというようなことがあって、ただ、ひとつ、やっぱりトランプ現象っていうのは、２０１６年から見るとね、福音派だけじゃなくて、やはり、かなりマイノリティなんですね。今回も特に」

水島「そうですね」

山中「黒人とスパニッシュ系がね…」

水島「増えている」

山中「それだけでも今回、バイデン民主党政権から２７％ぐらい動いちゃっているんですよ」

水島「あぁ～」

山中「そうすると、これって、やはり一番の最大の票田と言われるマイノリティ、黒人、そして、マイノリティの中で、一番多いスパニッシュ系。あと、ミドルクラス、あとは、レイバー・クラスですよね。そういったところが、どんどんトランプに切り替わっていったっていうのが、この２０１６年。大きな流れで、もっとお金持ちのゴルフクラブなんかでやっていた共和党のそういう伝統を、トランプがどんどん変えちゃったんですよね。共和党を作り替えてしまった。だから、私は、そういう流れは、この間も、つい１週間前ですけど、所謂、サウスブロンクスっていうニューヨークの中で一番、貧しい黒人とスパニッシュ系が住んでいる所に、私もニューヨークに友人が何人もいるので行ったら、もう入れないって言うんですね。それで警察の許可を４千人ぐらい取ったら、その８倍ぐらい人が来ちゃってゲートに入れない」

水島「あぁ～」

山中「もう、そういう、とんでもないことが起こって、しかも、それは民主党の牙城の中の一番の牙城」

水島「うん」

山中「８５どころか９５％ぐらいは民主党、過去１００年間、一回も共和党の大統領が勝ったことの無い選挙区ですよ」

水島「あぁ、はい、なるほどね」

山中「そこへトランプが行ったら、物凄いウェルカムで、一番、その中でも大きいのはスパニッシュ系の中南米の共産国、独裁国家から移民してきた人達ですよね。彼らがインタビュアーに答えて言っているのは、今、トランプに行われたあの４件の起訴と何十件の罪状っていうのは、全部、でっち上げの裁判。そして、これは私達の国、共産国家、独裁国家では、いつも頻繁に行われてきたことだと」

水島「あぁ、なるほどねぇ」

山中「つまり、我々は、いつでも、こういうことを見て来た。それが嫌で、それに、もう、迫害に耐えられずに希望の国としてアメリカに来たら、ここでも同じようなことが起きていると」

水島「うん」

山中「これに物凄く失望しているのだという風な答が、インタビューで、いくつも返って来る訳ですよ。やっぱり彼らは貧しい。そして貧しいと基本的に、みんな、民主党員になります。民主党は金を配りますから。黒人や生活保護だけじゃなくて、移民にもバンバンお金を配っている。バイデン政権は今も１千万を超える人達に物凄い金を配っているんですよ。ＮＧＯを通してね」

水島「うん」

山中「だから、そういうことで基本的に彼ら１千万人の後ろで民主党がやっているのは、前から続いていますが、民主党は一党永久独裁政権ですから、これを狙う為に、彼らになるべく早めに永住権、そうすると投票権ですから。永住権のあと市民権を渡すっていうことになってきていますので、大きな流れで、それを起こしていって、或いは、今、言われている October’s Surprise という１１月の選挙の前に何かが必ず起こるんですよ。

もしかしたらパンデミックか何かを使ってバイデン大統領は国家非常事態宣言を出すという噂も出ていますよね（笑）。そして、あぁ、じゃあ、選挙できないねと」

水島「できない」

山中「先延ばしと。こんなシナリオも考えられるというような話になっています。それ以上に非常に恐ろしいこと、僕は暴動だとかね、８月には、あの４年前、２０２０年の大統領選ね、もうブラック・ライブズ・マターで２千件以上の暴動ですから、あの焼き討ちと略奪を見て、僕は内戦状態に入ったと思ったので、もしかしたら、あれが予行演習で今年が本番になるっていう可能性もあるんじゃないかと思って」

水島「いや、そうですねぇ」

山中「アメリカの国内で言えばね」

水島「バイデンは今、インチキな世論調査って言われているけども、もう６ポイントぐらいトランプに離されているっていうね…」

山中「はい、そうですね、離されていますね」

水島「そのまま置く訳にはいかないっていうねぇ」

山中「えぇ」

水島「だから、おっしゃるように非常事態、パンデミックでやるか大規模なテロみたいな形でやるかね」

山中「或いは、国外戦争を本格的に、代理戦争じゃなく…」

水島「そうですね、さっき言ったイスラエル・イランというような形で、つまり、そうなるとエネルギーが、みんな、止まるじゃないですか」

山中「そうです」

水島「そうすると、日本もグダグダになっちゃうしねぇ。うん、まぁ、おっしゃるように、本当にやること、手段は色々あるんですね」

山中「真っ先に金を出させるのは、第一に、まず日本ですから」

水島「そうですね（苦笑）」

山中「はい」

水島「うん。まぁ、出しますよっていう感じでね（苦笑）」

一同「（笑）」

水島「はい、ということですけど、また、広げていきますけど、まず、岡さん、はい」

岡「あ、はい。岸田さんという前代未聞の酷い首相を今、頂いている訳ですよね」

水島「はい」

岡「ただ、あまりにも彼が酷過ぎるので、逆に日本人は目覚めたっていうか、それが良かったかなぁという気もするんですよ。ここまで酷い人って今迄、居なくて（笑）」

一同「（笑）」

水島「ね（笑）」

岡「何かね、悪いけど本当に酷いんですよ。それで岸田政権って今、全然、支持率が上がらないじゃないですか。それで、もう選挙は全部、負けているじゃないですか、地方の選挙」

水島「はい」

岡「これはね、やっぱり日本人が目覚めたのだと、私は思っているんですよ」

水島「うんうん」

岡「それで、ここまで来ると、さすがに日本が独立国ではないということに気が付いちゃって…」

水島「それも気が付いたんですねぇ」

岡「あぁ、やっぱり日本は独立していなかったんだって。結局、アメリカの一部だったんだということに、さすがに気が付いて、そうすると、それを隠して来た今迄のメディアっていうのはね、新聞とかテレビっていうのは全部、嘘だったっていうことに、ようやく気

が付いたと思うんですよ。そこに来て情報の伝わり方っていうのが、やっぱり最近、ＳＮＳを使ってね、凄く広く広がるようになったじゃないですか」

水島「はい」

岡「だから、この間、４月１３日の私達の池袋のデモ行進、あれは１万７千人ぐらい集まったって言われていますよ。これは凄い事だなって思っていて、あの時、沖縄から来た人も居たし、北海道から来た人も居たんですよ」

水島「うんうん」

岡「それで、何故、こんなに、みんなが来るようになったのかなって言うと、やっぱり目覚めている人が各地方に居て、それが一同に会するっていうことが今迄、無かったから気が付かなかったんだけれども、あの池袋で一同に会してみると、実は、凄く居たんだっていうことが、やっぱり、ひとつ言えるんじゃないかと思うんですよね」

水島「そう思いますね。少なくとも、ここ１５年、チャンネル桜は２０年やっていますけど、２０年の中で、あぁいう形で集まったのは４月１３日だけだと思います。我々もフジテレビの韓流に反対するとか色んな事をやりましたけど、せいぜい４千人、５千人ぐらいですよ」

岡「うん」

水島「あれは実質上、警察は７千人とか言っていたけど、道路にはみ出た人とか、やらない人が凄く多かったんで、少なくとも、何人と中々言えないけれども、おっしゃる通りだと思いますよ。歴史的にね、動員をかけられた組合とかそういうものじゃなくて日当とか交通費が払われないで、自分でお金を費やして自分で集まったっていうのは、おっしゃる通りだと思いますね」

岡「そうですよね」

水島「うん」

岡「だから、ある意味、私は日本が凄く大転換しているし、この流れで行くと既存のメディアっていうのも結局、岸田政権と共に滅びていくと思うんですよ。だからＮＨＫも国際放送を広告収入で賄わなければいけないぐらい困っているそうですよ」

水島「うん」

岡「だから公共放送と言いながらね、広告を取るっていうことは、結局、今迄、私達は公共放送ですから受信料で、と言っていたじゃないですか」

水島「うん」

岡「だから私達は偏らない放送をする為に国民の幅広い方々から受信料を取らなければ駄目だっていうことを、ずっと大義名分として来たじゃないですか」

水島「はい」

岡「だけど、さすがに、もう、それが出来なくなったんですよね」

水島「うん」

岡「あまりにも不払いが多いから」

水島「うん」

岡「それで広告収入を取るっていうことは、結局、私達は公共放送では無いっていうことですよね」

水島「うん」

岡「それを言わざるを得ないぐらい追い詰められていると思います。だから、凄くいい流れに来ているかなぁと思って、これを次に繋げていかなければならないし、せっかく目覚めた地方に居る人達が失望しないように、もっともっと、この流れを推進していくことが今、課せられているんじゃないかなと思います」

水島「そうですね。私達がこういう形でなぜ集まったんだろうっていうと、みんなで考えたり、色々したりするのは、まずひとつは命に関わる問題、つまりパンデミックの問題っていうのは命に関わるっていうことでね。ハッキリ言って、もう右も左もイデオロギーであぁだこうだと言う問題じゃなくて、これをやっていたら、こうなっちゃうよと。

それから国の主権に関わる問題、つまりＷＨＯのこのオジサンの言う事を何でも聞かなきゃいけない。国の法律まで従わなきゃいけないというようなこと、それから、もっと言えば、くっつけられた、さっき少数派って及川さんが言ったけど、やっぱり緊急事態条項の危険さっていうことに気が付いた人達が、もう、これじゃいかんということで、地方から集まってくれたとかね。

それと、もう一つ、これは大事な事なので、皆さんにも意見を聞きたいと思うんですけど、今迄、我々が聞いていた、或いは、言っていたのは、腐っても自民党って言っていたんですよ。つまり、あの民主党時代のとんでもない政治、いい加減な政治を見たら、あいつらに任せたら、とんでもないということで、ずぅ～っと引き続いてきた。だから、自民党の方が未だマシだよと。でも、最近、私も人に聞くと、腐っても自民党って言う奴が居なくなった。

あいつら、もっと最低だと。特にこのオジサンね、嘘をついて増税ばかりしているっていうね、この人の事を考えると、冷たいし、冷酷だし、嘘つきだし、所得倍増とか新自由主義からの脱却とか新しい資本主義とか、嘘をつきまくっていたっていうことが判って来たから、変な話だけど、立憲民主党でもいいんじゃないかっていう雰囲気が、もしかしたら生まれているかも分かんない。

つまり、今の選挙を見ていると、国民は、そのぐらい頭に来ているということですよ。本当に、まぁ、自民党の調査部っていうのは、しっかりしているから、このまま選挙をやったら相当、大負けするっていうのは知っているようですけどね。それでもやるかも分かんないっていうのは、まぁ、我々が言っている日本維新の会は新自由主義者の集団ですけど、菅義偉さんがプロデューサーですから、公明党が離れても、それでもくっつけばやれるだろうとか、今、自民党の連中も高をくくっているところあるんですよ。

多分、この人もそうだと思いますけどね。ただ、そこまでね、今、岡さんが言うように、日本の国民もこのまま行ったら本当にジリ貧どころか亡国になっちゃうという感覚を持ち始めている人が多いんじゃないかってね。モーガンさん、今、ちょっと手を挙げましたか」

モーガン「あぁ、ごめんなさい」

水島「どうぞ、言って下さい」

モーガン「未だに岸田さんしか居ないとおっしゃっている人、居ますよ。ＣＩＡよしこさんが言っています」

一同「(笑)」

モーガン「岸田さんしか居ないと、おっしゃっているんじゃないですか。未だに岸田さんしか居ないと言っている人が居ます」

水島「そうねぇ」

モーガン「信じられないですけども居ます」

近藤「私もね、ちょっと、そこは賛成ですよ。何故かと言いますと、皇統の問題を考えた時に岸田さんの後に出て来る総理が、この皇統の問題を、例えば、女性天皇とか女系天皇を容認するとか、女性皇族が結婚したあとの皇籍を保持するとか言い出してしまうと、これは国の根幹に関わる訳ですから、そこを冷静に見極めながら次に誰が出て来るのかっていうところを考えつつ、岸田さんを批判しつつ、支持しつつっていう、確かに凄く生温いことを言っているかもしれませんけれども…」

水島「いやいや。それは普通の考え方でね」

近藤「そこは悩ましい問題です」

水島「その通りっていうのもあるんだけど、まぁ、私もこの問題に、ずっと関わっているんで言わせて貰うと、つまり岸田を倒すって国民に力を与えるっていうのが、パワー・トゥー・ザ・ピープルが必要だと思っているんです。次に変な奴が居たら、こいつも、また倒せばいいという風にやって行かないと、今、皇統のことで少しマシだからとかね、ただ、実は危ないんですよ。あの養子の問題とかもね」

近藤「えぇ、えぇ」

水島「だから日本会議が今、ああいうところで容認し始めているところは、私は本当に危ないと思っている」

近藤「う～ん」

水島「だから、これは意見が違うと思うんだけども、あいつは、したたかですよ。エマニュエルの子分だから」

近藤「う～ん…」

水島「この人の頭じゃないんですよ」

近藤「はい、それは解ります、解ります」

水島「つまり、この男は、遠回しでもやっちゃうっていうね。言う事を聞いちゃうんだから、この画の下の部分をエマニュエルさんに替えてもいいぐらいですから。それでねぇ、やはり、ずぅ～っとやって来たのが、もう、これは２０年ぐらい前に皇統の問題で、小泉

さんの時に本当に女系天皇に替えようとしたんですよ」

近藤「うん。うんうん、うん」

水島「それで悠仁親王殿下がお生まれになったんですね。あれは本当に国の奇跡ですよ。だから今回、次は今、愛子内親王殿下を大変、持ち上げて、そこに養子を連れて来たらどうだとかね。女性宮家を残してとかね」

近藤「駄目です。危ないと思っています」

水島「旦那さんになる人も普通の一般の人であっても皇族にしちゃうとかね。もう、そういうことを搦め手からやろうというのがあるんで、それに乗っかっちゃうと拙いと思うんです」

近藤「いや、駄目だと思っています。はい」

水島「うん。だから、そこがね、この人自体は面の皮しかない脳が無い人かも分かんないけど、周りの奴はグローバリストの結構、頭のいい人達がやっていますからねぇ。という気がしているので、そこは考えなきゃいけないと思っているんですけどね、はい。どうぞ続けて下さい」

折本「(挙手)」

水島「あぁ、どうぞ。はい」

折本「今、おっしゃった皇室典範の問題も、僕は、所謂、免罪符だと思っているんですね」

水島「うん」

折本「要は、自民党が、そういうところを、敢えてカモフラージュして、だから、我々は、保守でしょっていう、まぁ、これって、みんなで靖国神社に参拝している国会議員と同じだと思いますよ。或いは、このブルーリボンもそうですけど」

水島「そうですね」

折本「それこそ救う意志の全く無い連中が、これを付ければ保守になれるみたいなですね」

水島「そうです」

折本「正に免罪符ですよね」

水島「うん」

折本「だから、これに騙されちゃいけないんです。自民党はずぅっと悪夢の民主党政権って言って来たけど、でも僕は今の自民党っていうのは最早、民主党以上の悪夢だと思いますね」

水島「うん」

折本「自民党か民主党かっていう選択で考えちゃいけないんですよ」

モーガン「はい、そうです」

折本「やっぱり自民党も駄目だし、他の野党も駄目です」

水島「うん」

折本「ただ、少なくとも自民党だけには投票しちゃいけないということですよ」

水島「うん」

折本「そこは、やっぱり共通理解にしていかないと、やっぱり自民党っていうのは色んな、そういう政策集団の寄り合い世帯ですから、そもそも自民党っていうのは自由党と民主党が、くっついて吉田茂のグループと鳩山一郎のグループがくっついて出来た政党ですから」

水島「まぁ、そうだね」

折本「党の中に色んな全く考えの違うグループが居る訳ですね。だから、そういう総裁、総理が売国的なことをやって、それで失職したとしても政権交代が起こらないんです。自民党の中の別の派閥のトップが今度は総裁になって、それで、疑似政権交代みたいな感じで、自民党の中で政権交代が起こって、それで禊は済んだとか言って責任を有耶無耶にし続けてきたのが正にこの５５年体制であって、自民党政治な訳であって、だから、結局、無責任な体系になっている訳ですね。

だから、やっぱり、その一つのけじめを付けなきゃいけない。それは自民党じゃなければ、何処かじゃない、じゃあ、何処にするんですかじゃなくて、少なくとも自民党には入れない。自民党以外のもの。もし、そこの該当がない、適任政党が無いのであれば、別に白紙でいいと思います。だから少なくとも自民党には入れるなっていうのは、やはり国民に訴えたい事です」

水島「そうですね。典型的なのは、まぁ、敢えて名前を言いますけど、ＬＧＢＴをエマニュエルの命令通り真面な審議もせずに進めたのが古屋圭司さん。これ、本当に友人です。それから稲田朋美。衆議院に入る時から一番の知り合いだった。それから新藤義孝。硫黄島（いおうじま）の伯父さんが泣いているぞというように、あぁ、硫黄島（いおうとう）ですね。失礼しました。そういうような形、全部、安倍さんの保守派と言われた人ですよ。

今頃になって、今、憲法を改正という嘘をやっている主役が古屋圭司さんですよ。こういう形で、この間、稲田朋美さんは調査船に乗って尖閣まで行ったんですよ。これは前から私に言っていたことですけど。つまり、そういう保守、今、折本さんが言った、本当にこういうバッヂも装うんですよ。これに騙されちゃいけないというかね、未だ居るんですよ。自民党の中にも真面目な人達が居るから、それは居ますよ。

私も優しい心を持っている人って居るのは知っているけど、それでも、折本さんの言う事を正しいと思うのはそこですよ。全部、ガス抜きになっているって。自分が意識する、しないとは別にね、だから今回は本当に日本国民の根性を見せないと」

折本「そうですね」

水島「うん」

折本「だから何か高市さんならいいのかとか言っていますけど」

水島「うん」

折本「私はそうは思いませんね。だって、この間、竹中平蔵と何か討論をやっていましたけども、結局、あの人だって元々小泉政権の時に小泉チルドレンか判んないですけど刺客候補で立っている訳ですよ。だから、そういう保守の仮面を被った人達っていうのが自民党の中に居ると。だから、ほんと、そういう保守の真面な人達は構造改革の時に、みんな、自民党から追い出されていると思いますね。はい」

水島「まぁ、私は、ざっぱりと切るつもりは無いんだけども、例えば、これは、よく言うんだけど、大石内蔵助が茶屋で遊んでいる時、脳溢血を起こして死んじゃったら、ぐぅたらの、いい加減な家老になる。徳川家康が武田信玄に負けて、うんこ垂れて逃げまくったっていうね、そこで死んじゃったら徳川幕府を開いた偉い奴になれない。

だから時間とか、そういう中で、色んな面で歴史的なものを持つだろうけども、今やっていることに関して、おっしゃったように、日本を裏切ることをやっている。日本を滅ぼすことをやっているっていうことを、しっかり見なきゃいけない。おっしゃるように前はどうだったかじゃないんですよね」

折本「はい」

水島「今、何をしようとしているのかっていうのは大事でね。私はおっしゃる通りだと思いますねぇ」

岡「私もね、あの小泉純一郎の時に靖国神社に参拝しているんだからと許していたんですよ」

水島「うん」

岡「だけど、結局、小泉さんのやったことって全てグローバリズムだったじゃないですか」

水島「そうですね」

岡「今にして思えばね。あの郵政民営化とか女性天皇とか、要は靖国神社に参拝していればいいんじゃないんですよね。だから、そういうことじゃなくって実質的に国民を豊かにしているかどうかであって、自民党の政治っていうのは全く豊かにして来なかったんですね」

水島「経済も、そういうところもね」

岡「うん」

水島「はい」

岡「だから、私も折本さんのおっしゃるように、今は自民党だけには投票してはいけないと思いますね」

折本「そうですね」

岡「うん」

水島「まぁ…」

折本「岸田さんだって新しい資本主義とか言っていましたよね」

岡「うん」

水島「言っていましたね」

折本「あれは何だったんですかね」

水島「新自由主義の脱却って言っていましたよ」

折本「そうです」

水島「今、もう新自由主義そのものじゃねぇか、お前はっていうね」

折本「そうですねぇ」

水島「それも所得倍増っていうのが一番、腹立つって、この嘘はね」

折本「本当に、そうですね（笑）」

水島「ほんとに（笑）」

モーガン「ちょっと過激なことを言っちゃっていいですか」

水島「あぁ、はい」

モーガン「今迄はどうだったかって思うかもしれないですけど（笑）」

一同「（笑）」

水島「はい」

モーガン「自民党問題だけじゃなくて、日本には民主主義が全く無い訳ですよ。全てがパフォーマンスです。最近、ニュースになっているつばさの党ですけれども、私は、つばさの党が大好きですよ」

水島「うん」

一同「（笑）」

モーガン「大好き。何故かと言うと、あの党は日本の民主主義が本当のものじゃないと、国民に見せて貰っているからです。だって、ちゃんとした選挙ではないですよ。やっていることは非常に失礼だと私は認めていますよ。それはやっちゃいけないことですけれども、選挙はそもそもフェイクですので、自民党かどうかで、岸田の次は誰かと、それは、とても重要なご指摘だと思うんですけれども、安倍さんをご覧下さい。安倍さんっていう愛国者は暗殺されました。それはＣＩＡがやった訳です。

岸田の次は誰かと、どうでもいい訳ですよ。岸田の次は、岸田のクローンに決まっているじゃないですか。そういう問題です。つばさの党にそれを見せて貰っている。そういう意味では、私はつばさの党が非常に重要な役割を果たしていると考えています。民主主義ではないです」

山中「民主主義じゃないってことでね、ちょっと」

モーガン「はい」

山中「一つ、僕はアメリカの友人と毎日っていうか、当然、いつも一緒に話しているんですがね、いつ選挙があるんだと。つまり、いつ解散があるんだって、彼らは必ず聞きますよ。普通、一般的に何処でも、いつ解散があるか分からない、いつ選挙日があるか分からないってね、アメリカでは、あり得ないことですよ」

水島「あぁ～」

山中「これが日本だけであってね」

水島「そうですねぇ」

山中「それは、いつも首相が一人で決めて首相の一番、都合のいいベストタイミングで選挙あるんだよって言うとね、それって不正選挙じゃないかって言われるんですよ」

水島「そりゃ、そうですよね（笑）」

山中「そうそう、そう」

水島「ある意味では、そうですね」

山中「普通に考えると、そうですよ。片方が決められる人は一番、自分の都合のいい時だけに、はいってやる訳でしょ。それで、今、もう一つ、モーガン先生が言われた、つまり、日本には民主主義が無い。これね、日本でずぅっと、日本だけで言うと、そんなことはないよって、日本はアメリカの真似して民主主義を戦後、取り入れたってなっているんだけど、結局のところ自民党一党独裁じゃないですか。ずぅ～っと党として。一党独裁、こんなに、何十年も引き続くっていうことは、これは世界では共産国家か独裁国家しかないんですよ」

モーガン「（拍手）」

山中「だから、それが今、この国ではずっと起きていて、我々はそうじゃない、自由と民主主義のね」

モーガン「そうです」

山中「アメリカさんから習ってやって来たんだって、そう言う人は、アメリカは一応、未だ２党制になっていますが、今、一生懸命、民主党がやろうとしているのは一党永久独裁政権への道を、一生懸命、法律を変えるとか…」

モーガン「そうです」

山中「最高裁の判事を増やそうと色んな事をやっている訳じゃないですか」

水島「うんうん」

山中「だから、じゃあ、我々も今度、日本みたいに一党独裁の国になっちゃおうかなぁなんて（笑）、ある意味、逆説的なことを言われたりしますよね」

モーガン「それを操っているのがアメリカ様です」

山中「そうなんです」

モーガン「アメリカ様に仕えているのが日本の保守系です」

山中「うん」

モーガン「自民党がアメリカ様に仕える為に。この間、典型的な拝米保守の長島昭久さんから…」

一同「(笑)」

モーガン「これを貰ったんですけども、自分のプロモーションの中に自分がアメリカの大統領を演じている白人に遜っている写真を載せているんですよ。自分の政治的なプロモーションの中で、これは、変ですよ。何が同封されているかって言うと、自民党へご入党戴きたいと。もう自民党を支持して下さいって、私は潔癖です。私はパーティ券問題に関わっていないというんですけれども、その問題じゃないですよ。パーティ券問題じゃないですよ。

この人が売国奴です。この人の党が、外国の政治の為に動いていることが問題ですよ。パーティ券問題って、それはどうでもいいですよ。それは可愛いレベルですよ。この人が、もう忠実的に外国人に仕えている事を自分の自慢として、これを発信しているんですよ。それが私の仕事をちゃんとやっているって自分のプロモーションの中で、その写真が載っている訳ですよ。これ、ＶＣジャポンですよ。普通は、こうしないですよ。バイデンが習近平に、ちゃんと仕えているよという写真を自分のプロモーションに載せないですよ。そうしている訳ですけれども、それは発信しないですよ」

山中「そこに日本の国益は何にもないですよ」

モーガン「これ、変ですよ。はい、これは変ですよ。これ、自民党ですよ。全員、売国奴ばかりですよ。全員、売国奴。ほんと」

水島「長島さんはアメリカとか何か行っているんですよね。呼ばれて行く人達は、みんな、チェック。検査されるって言われていますね。こいつは将来、アメリカの為に役立つ政治家になれるのかどうか（苦笑)」

モーガン「そうですよ」

水島「ある人が民主党の代表になったイケメン風の男が行って、失格の烙印を押されたとかね。昔、そういう話を聞いたことありますけど」

モーガン「そうですよ。それが自民党です」

水島「長島さんもそれに合わせたいのでしょうね。はい。及川さんはどうですか」

及川「グローバリズムっていうね、今日、最初の方で出た観点から言うと、今、ここで議論されている様に、日本の政界は混乱している訳ですよね。最大与党は、こうやって批判をされている。首相は物凄く支持率が低い」

水島「うん」

及川「その画にあるように日本のグローバリストは岸田であると言われているんですけど、もうちょっと俯瞰した見方をすると、岸田も誰かに使われている訳ですね。じゃあ、一体、この状況で何が起こっているかって言うと、自民党の支持率も物凄く下がっているけど、他の政党だって下がっていて、支持率が上がっているのは無党派ですよね」

水島「うん」

及川「支持政党無しが過半数を占めているという。だから、この前の衆議院補選をやったって投票率は、とんでもなく低いし」

水島「５割いかないですね」

及川「いかない」

水島「はい」

及川「こんなのが民主主義なのかっていうのもあるし、全く同じことがアメリカでも起きている」

水島「うん」

及川「２０年前に、私はアメリカっていうのは二大政党の国だと思っていて、共和党と民主党の人達が、少なくとも６割か７割、居た訳ですよ」

水島「うん」

及川「今のアメリカって無党派が５割ですよね。共和党と民主党を支持しているのなんて、もう半分も居ない訳ですよ。だから、結局、増えているのは、アメリカで今、一番、伸びているのは無党派ですよ。インディペンデント。何処も支持しないっていうね。これこそがグローバリストの望んでいた状況であって、それぞれの国で対立を起こさせて混乱を起こさせて、あぁ、もう政治なんか駄目だと」

水島「うんうん」

及川「もう政治は嫌だと。ついでに宗教も嫌だと。政治と宗教を駄目にして、混乱をさせて、最後に喜んでいるのは、やっぱりグローバリストだと思うんですよ。だから、この人達も、グローバリストの駒にしか過ぎなくて本当のグローバリストじゃないと思うんです。単なるパペット」

水島「役者だよね」

及川「役者ですね」

水島「舞台で演じている人達」

及川「ビル・ゲイツさんも表に出ているってことは、やっぱり役者だと思います」

水島「はい、そういうことですね」

及川「その裏に本当のグローバリストが居るので、我々は、そこを見抜かないと彼らと戦っても勝てないですよ」

水島「そうですね」

及川「この状況は変わらないと思う」

水島「それとね、今言った様に、そういう人達、まぁ、目に見えるのは、こういう人達や、例えばバイデン政権のネオコンの人達とか、こういうものだけども、現実的に、この間、反ダボス会議の反グローバリズム会議っていうのを東京と大阪で主催してくれたけど、まぁ、そういうことも含めて、私達が今、闘っているのは、もしかしたら、でもプラスに考えて、今の日本で５割いかないっていうのは、少なくとも、この連中が積極的か消極的かは別として、こういう政治家達を全然、信用していない。

今の既成のそういう観念やイデオロギーを言っている事や人間を全然、信用していない。それがいいとか悪いじゃないんですよね。ただ、その５割がね、さっき言った様に４月１３日のような形になれば、やっぱり日本も変わって行くしね。今言ったように、あの政治を見ていたら馬鹿みたいだなと。あんな奴らに関わっていて、あぁだこうだやっていても、しょうがないと思うのも無理がないっていう感じがするっていう気がするんですね。

だから、今、おっしゃったように５割が来ていないっていうことは凄く大事なことで、じゃあ、その５割が来るような、或いは、立ち上がるようなことが出来れば、世界も変わるっていう感じはするんですね。

それとモーガンさん、ちょっと申し訳ないんだけど、さっきのつばさの党のことだけは、私の方の体験を言っておかなきゃいけないけど」

モーガン「はい」

水島「私達は以前、シバキ隊というのに街宣を邪魔されました。武蔵野市の住民投票条例」

モーガン「はい」

水島「あれに反対を出したら奴らが同じように押しかけて、我々の演壇の前に３つ、４つと、スピーカーを並べて雑音出して、殆ど私達が言っている演説を聞こえないようにしたんですよ。それで、警察、お前達、取り締まれと言っても、警察はトラブルを起こさないようにするだけですって言ったんで、だったら、俺はこいつらを止めるぞって言って演壇を降りて行こうしたら、私達は止められるんです。

だから、つばさの党の連中は、あれはあれで信念でやっていると思うので、その代わり相手側の運動員も、彼らをぶっとばしていい権利を与えろと」

モーガン「はい」

水島「警察は中途半端にやっているから駄目な訳で、それで、あとになってから逮捕だなんだってね。我々は法を犯すとか何とかっていう本当に自由をやるなら、つばさの党に対しては、あの運動員達をぶっ飛ばしてボコボコにする権利を与えろと、私も、あの時、そう思ったんです。

シバキ隊の連中は、わぁわぁやっているけど、我々が止めるぞって言って行こうとすると、警察は止めるんです。そういう本当の民主主義っていうのかな、身体を張った民主主義っていうのは、どっちにもね、オドオドして、そのままやっているっていうのも、ま

ぁ、選挙だから、運動員も、あまり乱暴な事を出来ないっていう、だから、私は、そういうところで、あの運動員達が何も出来ないことをいいことにして、やりたい放題をやるっていうのはね、あまり潔く良く思わないということがあって、私達も被害者になっていたから、そのことは、つばさの党の連中の主張は、ある程度、解りますけど、嘘だってことを暴きたいっていうのはね」

モーガン「はい」

水島「ということを、ちょっと言っておきたい。どうですか。私は、じゃあ、俺達にも相手が妨害したら妨害を排除させることをやらせろよと。警察が何もやらないんだから。前に武蔵野署に強硬に抗議したんですよ。俺達はやられるままかいと。だから、もみ合いがなければ、それでいいのかいって言ってね。武蔵野署に怒った訳だよ」

モーガン「はい」

水島「そうしたら次、二回目の時は、武蔵野署の警備課長が一応、謝りに来ましたけどね。だったら、しっかり止めろよということがあってねぇ、あの辺の問題は中々、彼らにも、そういうことをやると思い切って決意したんだから。やる権利はあってもいいと思うけども、やる以上はやられてもしょうがないっていう権利を向こうの運動員にも与えるべきだ。もう身体を張ってやれよと。私らは、それでやるっていう覚悟で、いつも街宣をやっているんでね。だから警察も手を出さないで間に入っているだけでね。あの時、音は全然、やれなかった訳ですよ。

だから、そういうことがあるんだったら、そういうことも自由にさせろよと。乱闘させたら、お前らのせいだっていうことを、警察に言わなきゃいけない。我々は、自由を守る為とか、言論の自由の為に身体を張らなきゃいけないと思っているから。つまり、そういうね、相手は選挙だから、絶対に恰好の悪い事はしないっていうことを、あの連中だって、つばさの党の連中、黒川君もここに出たことあるけども、それは、それなりに頭があるから、こうやれば絶対に彼らはやらない。俺達だけがやれるみたいなことは分かっているから、どうもね、あんまり潔く感じないんでね」

モーガン「うん、そうですね」

水島「まぁ、あれは本当に警察が悪いんですよ。責任を取りたくないから放置する。だから反撃権を与えろって、もし、攻撃されたらということをね。私は、あれを見て思ったんでね、やられた方だったから、やられた側には、やり返す権利を与えろよというところがありました（苦笑）」

近藤「あ、宜しいですか」

水島「はい、どうぞ」

近藤「私は江東区民ですので、つばさの党は普通に迷惑でした（笑）。迷惑でしたし、そこで、もし、今回、日本保守党とか維新とかが被害を受けたように、例えば、そこでシバキ隊から攻撃を受けた水島先生のように、やり返してってなったら、江東区民は尚更、迷惑と感じて、更に、そういった選挙とか政治に対する関心は、どんどん引いて行ってしまうから、やっぱり暴力で何かを覆すとか、勿論、民主主義が無いって、モーガン先生がおっしゃることも判るけども、暴力でもって何かを覆す。それに対して、また力で何かっていうのは一般の政治に、あまりコミットしていないというか、興味の無い普通の人達、今回

の１５区で言えば、投票率４０％、残りの６０％は興味が無かったという人達は、更に引いてしまうので、立候補する方、応援する方、勿論、意見を戦わすっていうのは大事だけども、やっぱり節度は守って欲しいっていうのは今回、あの１５区の有権者として本当に思いました」

山中「私もねぇ、１５区で応援に入ったんですよ」

近藤「はい、そうですよね」

山中「その時に、あれを受けたんですよ。それでね、その場合、大きなスピーカーっていうのもあったけど、太鼓を叩いてチンドン屋みたいなのをやっていたんですよ。煩くて聞こえないぐらいの、それは、例えば、新橋とかそういう所も３階建てぐらいのでっかいスピーカーを、それこそ立てて目の前でやっていてね（苦笑）。ただねぇ、私はその時、ずっと、彼らを無視していたんだけど、結局、言論の自由の妨害を自分達の自由だって言っている訳でしょ。ところが言論の自由を妨害する人間は、自分以外の我々のような普通の人の言論の自由を侵害している訳ですよね。この侵害している人は自分らの権利、自分達の主張を侵害されても文句は言えない訳ですよ。

自分達の庭でやるならいいけど、相手の所へ行って、目の前でするのは言論の自由の妨害であり、民主主義で、それは絶対に許されないことですよ。だから、それをやるなら、それこそ、今、水島社長が言われたような、彼ら自身、何らかの報復って言ったらあれだけども…」

水島「反撃権を与えるとかね」

山中「反撃なり、報いなりね」

水島「うん」

山中「それが本当は刑法でなきゃいけないんだけども、今回、彼らは、選挙期間が終わったってことで一応、罪にはなりましたけどね、やっぱり民主主義社会で言論の自由より大事なことは無い。一番、大事なのは、やっぱり、そこだと思うから、だから基本的にあぁいう YouTube の検閲にしても、私は基本的に反対なんですけど、その延長ですよね」

モーガン「私が言いたいのは言論の自由が無いということです」

水島「うん、うん」

モーガン「だって言っちゃいけない言葉があるぐらいですから、この国は民主主義ではないです。それを目覚ませてくれているのは、つばさの党。でも、やられたら絶対に嫌ですよ」

山中「反論組織としてね（笑）」

モーガン「そう。絶対に嫌ですよ。やっていることは失礼ですし、水島社長が他の所では、人の家にまで行ってとか、子供が出ているとかおっしゃっていました」

水島「ヤバいですよ」

モーガン「それは絶対に嫌ですし、やっていることは好きではないですよ。でも、私が言いたいのは、この国が占領されている訳です。民主主義ではなくて言論の自由が無い。

で、そいつらがやっていることを見て、私があっと思ったのは、じゃあ、この民主主義は、ただのパフォーマンスだと。その意味では、やられたら絶対に嫌ですけれども、その意味では、大事な役割を果たしているんじゃないかっていうことです」

山中「多くの人に気づかせたという意味があると」

モーガン「そういうことを言いたいです。はい」

水島「うん」

岡「まぁ、やっぱり、私は日本の選挙制度自体が全くの欺瞞だと思うんですよ」

水島「うん、そうですね」

岡「だって小池さんが自分の経歴詐称を、ずぅっと、やり続けて来たじゃないですか。それなのに何の罰も受けていないじゃないですか。だから、それ自体、もう民主主義じゃない訳ですよ」

モーガン「そうです」

岡「だから小池さんは、つばさの党を批判できないと思いますよ。自分だって散々公職選挙法違反をやってきたんだからね」

モーガン「そうです、それが言いたいです、はい」

水島「まぁ、今言った様にね、私がこういうのを見た時に思い出したのは、前にヘイトスピーチ法の時がそうだったんですよ。私達は当時の在特会と同じ主張をしていたんです。在特会の代表だった桜井君は最初、在特会を始める時、私に顧問を頼んで来た。在日朝鮮人の特権と言われるようなものについて生活保護とか色んな問題についてね、これは、私も大体、同じ意見だったから、いや、なりたいけど、あの当時は委託放送事業者っていう立場だったから、応援はするからっていう話をしたけど顧問にはなりませんでした。

でもね、何処で意見が違ったかって言うと、みんなに知らせる為にはしょうがないんだって言って、まぁ、汚い言葉ですから承知して聞いて下さいね。朝鮮人は日本から出て行けっていうことでも、私は罪を犯した朝鮮人は、日本から叩き出せって言うならいいと。だけど、普通に生きている人達に出て行けっていうのは拙い。

それから、これも言いたくないけど、朝鮮人はゴキブリだとか何とかとかね、平気で、ふれ回って、国連で、その映像を出されたんですよ。それでヘイトスピーチ法への流れがあった。私は西田昌司と散々２時間以上、激論したんだけど、彼は、そういうのがあるんだからしょうがないって、それでヘイトスピーチ法って成立しちゃったんですよ。

私は彼らにも言っていた事はね、思いは解るけども、そういう在日特権とかね、こういうものに対して言うのはいいけども、こういう言い方をしたら、殆どの人は、みんな誤解して、返ってそういう変な法律を作られちゃうよと。案の定、そうなっているんですよ。

今、元在特会の彼らは怒るかも分からないけど、私に対しては綺麗事保守って言っていたんですよ。このぐらいやらなきゃ、日本人は分からないんだって。分からないって、今、結果はどうなっているって、悪くなっているばっかりじゃないかと。外国人の特権だ何だというのは、お前らのせいだとは言わないけどね。

我々が我慢しながら、それなりに品格を保ってね、言うことは、ちゃんと言っているけども、そういうゴキブリだ、豚だ何だとかね、こういう汚い表現でやってプラスになることは無いと、これが利用されるんだって言って、案の定、国連の人権委員会とかへ左翼の連中に映像を持って行かれて、それで、また日本へ戻って来て、それでヘイトスピーチ法やったんですよ。あの保守と言われた西田昌司も、まぁ、あの人は、ちょっと色が違うと思うけど、それを賛成したんですよ。だから、こういうことを奴らはちゃんとやるからね。我々はしっかり、そこら辺のところの、さっき言ったのは及川さんかな、常識っていうね」

及川「常識」

水島「常識っていうところは、ある程度、人間としてやっておかなきゃいけないじゃないかと。もう言いたいことは、私も言っているって言われているけども（笑）」

一同「（笑）」

水島「実際は、それなりに少しは抑えているんですよ（笑）。もっと抑えてねっていう噂もあるけど。だから、そういうことがあって、この運動の中で、本当に国民の為になるのかとか、もう一つ言うと、うちの人達に言うのは、天皇陛下の前で同じことを言えるかっていうことを、ちゃんと考えようと。或いは、そういう皇族の前で、こういう言葉を使ったり、何とか反対とか言ったりするのはいいけども、本当にそういう振る舞いっていうのは、やはり考えるべきだろうということを、まぁ、少し余計な話になったかも分かんないけどね、つばさの党の人達は、私も少しは知っている人達だから、思いとか、そういうのは解らんところも無いことは無いんですけどね。ただ、やり方とかはね、本当に日本の為に考えて貰いたいっていうね。絶対に効果のあるやり方をして貰いたいと思うし、やっぱり、今、彼女が言ってくれたけど、あまり効果がなかったと思うね」

近藤「もう、そうです…」

水島「でも、正直言うと我々も、ああいう連中だと思われているんですよ。そうじゃない、まぁ、考え方が似ているところもあるんですよ。でも、そうじゃないところもあるんでねぇ。辛いところですよ」

近藤「でも、この伝え方っていうのは…」

水島「あるよね。表現のね」

近藤「やっぱり考えていかないといけないかなと思いますね」

水島「うん。まぁ、そういうようなことがあってね。色んな意見があっていいと思う。表現もあっていいと思います」

近藤「うん」

水島「ただ、私がいつも思うのは、日本に死刑制度があるのは、公的に復讐権があるということで、我々は、例えば自分の女房にしろ、愛する人にしろ殺されたらね、そいつをぶち殺したいっていう思いはあるけれども、これは国家というところで、ちゃんと規律の中でね、罰則を与えるっていうようなことを含めて、やっぱり常識と言うかねぇ、そこのところは、何とか折り合いつけながらいきませんかということです。やる時は、みんな、や

ればいいんですよ、本当に死にもの狂いで、本当にそうなんだ。ちょろちょろした所で、そんなことをやったってしょうがないから、命懸けでやる時が必ず来るので、一応、ヤバイことを言っている訳じゃないですからね（笑）。そういうことですから、皆さん、しっかり日本人としての誇りをもっていきましょうなんて言って、変な纏め方だっていう（笑）」

一同「（笑）」

水島「最後に一言、ある方が居たら、もう時間が過ぎていますけど、急ぎ足で一言あったら、はい、そちらからいきましょうか」

折本「そうですね。まぁ、やっぱりグローバリズムからの脱却ということですけども、まぁ、特に私みたいな政治家とか議員は、地に足を付けて、しっかりと、そういう土着の政治家にならなきゃいけないと。東京１５区もそうですけども、ああやってネットの中で、わぁ～っと盛り上がって色々騒ぎ立てて、でも選挙が終わったら、結局、居なくなっちゃうじゃないですか」

近藤「そうなんです」

折本「だから自分達は正しい事を言っているから許されるとか言うのではなくて、一人一人の国民の方をちゃんと向いて、それで根を下ろしていくっていうことが大事だと思うんです。その積み重ねが力になって行くと思いますので、そういう意味では、やっぱり、ただ、そういう活動をして地道にやった人が報われる、ちょっと、まぁ、ありきたりの話で恐縮ですけども、報われるって別の言い方をすれば、選挙で勝てる社会にしていかないと、どうせ自民党が勝つんでしょとか、どうせ政党に属してないと勝てないんでしょ、みたいな諦めみたいなものが、やっぱりニヒリズムを生んで、要は、ニヒリズムが、そういう暴力、テロリズムを生むんだと。

だから今回のつばさの党の問題にしても、僕は言うなら、合法的テロだと思いますよ。まぁ、捕まったので合法じゃないですけど、ただ彼らなりに考えて、結局、自分達は少数派なんでしょ。少数派って言うか、こんな選挙なんて茶番でしょと。フェイクでしょ、結果は決まっているんでしょと。だったら騒ぎ立てて取り敢えず主張が伝わればいいやぐらいの感じかもしれません。ただ、そういうものを生み出してしまった構造というか、背景みたいなものも、ちゃんと見なきゃいけないと」

水島「そりゃそうだね」

折本「要するに、我々がそういう主張をしているような、そういうことが結局、報道もされないし、選挙の中で広がっていかない訳ですね。勝てないと」

水島「うん」

折本「だから、結局、今の民主主義の中ではメディアによってつくられた多数派が勝ち続けると。やはり、この状況を打破していかないと、ああいう現象は続いていくのかなという風に思います」

水島「そうですね」

折本「はい」

水島「はい、有難うございます。モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい、今日も有難うございます。つばさの党ですけれども、日本は戦争中です」

水島「うん」

モーガン「民主主義とか、ただの茶番です。私もそう思っております」

水島「うん」

モーガン「そう気づかせてくれたつばさの党は、やっていることには非常識なことばっかりやっていると思いますが…」

折本「あ、私は全く擁護している訳じゃないんですけれども、その構造を見るべきだってことだと思います。はい」

モーガン「構造を見ると」

折本「はい」

モーガン「まぁ、合法テロとおっしゃったと思いますが、つばさの党は、合法テロかもしれないんですけれども、多分、そうだと思いますが、もっと大きな話で言うと、日米同盟こそが合法テロです。今の戦後こそが合法テロです。ワシントンがこの国を支配していることは合法テロです」

水島「うん」

モーガン「つばさの党は未だ可愛い方です。もし、つばさの党っていう嫌な存在が、そういうことを気づかせてくれれば有難いなぁと思っております。以上です」

水島「そうですね。はい。有難うございます。では、近藤さん、お願いします」

近藤「はい、有難うございます。ちょっと、今日の本筋からずれるかな、いや、ずれないかな。私はＬＧＢＴと多様性を考える会というのを竹内久美子先生とか橋本琴絵さんですとかとやっておりまして、皆様方のご賛同を力にして、このＬＧＢＴを…私は、決して差別主義者ではないので、同性愛とか両性愛の方を排除するつもりは一切、ございません。私の友人にも居ます。同性愛者の人も友達です」

水島「うん」

近藤「ただ私達が問題にしているのは、冒頭で山中さんもおっしゃって下さいましたけれども、おかしな性教育を子供達に施しているのが、実際、アメリカであったりイギリスであったり、それは一周回って日本で行われようとしているということに対して、私達は反対しておりますので、今日、この番組をご覧になっている皆様方、『ＬＧＢＴと多様性を考える』で検索しますと、私達のホームページが出てきます。金銭はかかりませんので賛同人として登録して戴けますと、私達の活動の力、勇気になりますので、是非、サイトを見て戴きたいと思っております。今日は呼んで戴いて本当に有難うございました」

水島「はいはい」

近藤「はい（礼）」

水島「竹内さんは明後日、私の FrontJapan 桜という枠にゲストで新刊本を引き下げて出演

なさいます。中々面白い本でした」

近藤「はい」

水島「楽しみにして下さい」

近藤「はい。宜しくお願いします」

水島「はい、有難うございます。及川さん、お願いします」

及川「はい。先程、ちょっと触れたようにグローバリストは今、高笑いしていると思うんですね」

水島「そうですね」

及川「これだけ日本も世界も大混乱して、もう政治なんか、どうしようもないなって引いている人達がどんどん増えている。これこそ、正に彼らの目的に適っていて、今日の議論の中で、折本さんが最初の方に出入国管理法の改正に触れていらっしゃいましたが、これこそ正にグローバリストが予定していた最優先事項だったと思うんですよ。今の国会で何を通したかったのか」

水島「うん」

及川「それは日本が移民大国に…もう、なっているんだけど、この３年後以降に大量の移民が入って来るんですよ。それが、もう衆議院を通過しちゃったから」

水島「うん」

及川「もう参議院も通過するに決まっているので、これから、とんでもない数の外国人労働者がこの国に入って来る。その事実を分からないようにしている。これが本来、グローバリズムの問題として、一番、大きな問題なのに、でも、それを見えないように、他に色んな事を起こしてくれているんですよね。まぁ、つばさの党も、それかもしれないんだけど、だから、誰も気づかない内に、さらっと出入国管理法」

水島「うん」

及川「育成就労ですか？」

折本「育成就労」

及川「それ、育成就労制度」

水島「そうだね」

及川「これ、育成就労制度という物凄く甘いものです」

水島「うん」

及川「外国人労働者が無制限で入って来て、それで永住権まで与えちゃうっていう世界でも稀に見る移民法が日本で決まるんですよ」

水島「うん」

及川「そのことを、みんなに判らないようにしている」

水島「そうだねぇ」

及川「これねぇ、もう遅いですよ。Too Late。もう、ほんとに遅い、もう入って来る。で、それも誰も止められないと思う。でも、我々は、その現実を受け入れなきゃいけないです。とんでもない犯罪率になりますよ」

水島「うん」

及川「女性と子供が狙われるだけだから。これから日本は物凄い犯罪国家になるっていうことを、我々は覚悟しなきゃいけないと思います」

水島「でも、それを言っておくことが大事だね。本当に間違いなくそうなるんですよ。それで国柄が変わるっていうね。日本という土地はあるけど本来の日本じゃなくなるっていうね」

及川「既にアメリカとヨーロッパで起きたことが今、日本で起こるっていうことが国会で決まったんです。これは知っておいた方がいいですね」

水島「そうですね。運用でやれるもんじゃないよね。こうなっちゃうとね、そういう法律を作られちゃうということですけどね。はい、有難うございます。山中さん、お願いします」

山中「本当に及川さんの意見に全く同意なんですよね」

及川「まぁ、こんなことを言ってくれたのは、山中さんの政党、参政党だけですね」

山中「あぁ、そうですね（笑）、移民反対も言っていますしね、ＬＧＢＴも正式に反対です。これも、ずっと言っていますしね。やっぱりねぇ、僕も、ずっとアメリカへ行ったり来たりが長い。そうするとね、やっぱりアメリカで、まぁ、たった３年で１千２百万人。だけど、その前、ヨーロッパでは、ずっと長いこと各国がじゃんじゃん入れろということになって、もう国境が無い訳ですから、それで通貨はユーロっていうやつで全部、統一でしょ。統一で管理していくっていうのがグローバリストですから。

この間、フランス人の若い３２歳の女性の政治家がこういう風に言った訳ですよ。ＥＵの総会の幹部の皆さんの前で、皆さん、貴方達が数十年前に掲げたＥＵは平和的な国になり、ＥＵは沢山の移民を入れて、それによって経済的に豊かになり、そして多様性のある素晴らしい社会になるんだと言いましたねと。ところが私は３２歳ですが、大人になって、たった２０年ぐらいしか生きていない私が見ている今、ＥＵというのは、所謂、アメリカのデジタル植民地」

水島「うん」

山中「デジタル植民地って、我々のプラットホームは全部、Google から何から、アメリカのシリコンバレーの会社によって運営されている訳です。世界中がこれで動いている訳ですよ。ヨーロッパが、それになってしまった。そして経済的には中国の植民地になってしまった」

水島「うん」

山中「ＥＵは、中国との貿易が未だに凄いですからね。それで、三番目にはアフリカと中東から物凄い数の移民を受け入れた訳ですね。それによって移民による人口的植民地にされてしまった。今、日本で起きているのは、まるっきり同じようなことですよ」

水島「全くそうだね」

山中「えぇ。そして、それが今、及川さんの言われた北欧だけじゃない、もうイタリアから何から、あれだけ移民を入れたヨーロッパがあれだけの犯罪率になっちゃって、大きな揺り戻しが起きていて、アメリカも同じくトランプ政権でそれが起きて、ただ、今、せめぎ合いで、どっちが転ぶかという大変なことが来ているけど、今、日本は、はっきり言ってアメリカ、バイデン政権、もうグローバル政権の一番、ど真ん中の大統領の言う事を、そのまま聞いて、はいはい一ってやって、どんどん、じゃんじゃん、金をくれって言われただけ出すよという風になっちゃっていますんで、更に本当に大変なのは、これから本格的に来るんじゃないかという風に考えています」

水島「そうですね。はい。その通りだと思いますね。では、岡さん、お願いします」

岡「まぁ、あまり希望が無いんだけども、でも、このパンデミック条約をきっかけにして日本人が、戦後、日本は全く独立国ではなかったことに気づいたっていうのが、ひとつの希望かなと思います。これがあって良かったなっていうか、もっと目覚める日本人を増やして、頑張りたいと思います」

水島「はい。有難うございます。まぁ、私から言うと、今日、出なかったんですけど、台湾有事っていうね、保守が言っていますけど、こんな無責任な言い方は無いっていうのは、誰もが今、一応、免罪符みたいに言っているんですよ。台湾有事は日本の有事だって。いいよ、じゃあ、本当に戦うつもりがあるのかと。全然、そんな根性も準備も何も出来ていないですよ。結局、何があるかと言ったら、台湾の人を見捨てることになるんですよ。許し難い暴挙とか経済的に応援するとか色んな事を言うけれども、経済封鎖。中国は基本的に経済封鎖ですから、台湾の経済を封鎖しちゃったら、台湾が封鎖されたら誰が突破するかって言ったら、油も食糧も、台湾は本当に数か月、もたないですよ。

周り取り囲まれちゃったら、今回の訓練っていうのか、あれも台湾周辺を封鎖して、どうするんだと。それは日本を突破するようなことをやるのかと。だから、また岸田さんの遺憾砲だけですよ。つまり、こう言いながら、さっきモーガンさんが言った似非保守達はね、台湾とは運命共同体、いいですよ。本当に運命共同体的なとろがあるけれど、じゃあ、どうするってことは全く具体的に考えていない。結局、見捨てるんですよ。

或いは、もう一つ、今日のグローバリズムで言うと、アメリカの基本は台湾と中国をくっつけることだと思う。グローバリスト達は国境を無くす訳ですよ。都合のいい状態でコントロール出来れば、台湾を中華民国だろうと中華連邦だろうと、くっつけちゃおうっていうのが底流に流れているのは、それだと思うから、台湾なんか守るつもりは全然、無い。

もっと言えば、東アジアも日本と台湾と中国と国境を無くしちゃって自由なマーケットで、ふんだくったり色々なことが出来るたりするようなね、経済的な疎開みたいな状態にしたいということを、我々がグローバリストのことを言うなら、東アジアの今、キャンベルが国務副長官になりましたけど、そこまで考えているっていう状態を考えていかなきゃいけないと思いますね。

グローバリストのやっていることは、本当に国境なんか関係ないんですよ。言う事を聞いて、商売になってお金がいくらでも儲けられるような状態。この状態を求めているという本質的なところを見ておかなきゃいけない。我々日本の危機っていうのは、本当にそこにあると思いますね。だからモーガンさんがいつも繰り返し言っている様に、我々は本当に対米従属どころじゃなくて拝米従属になっている」

モーガン「（頷く）」

水島「本当に拙い、少しでもいいから、一歩でもいいから、独立不羈の主権国家として一歩一歩、前に出していかなきゃいけないと思いますね。だから及川さんが言った移民の問題は、移民法の問題で、正直言うと、これは本当に致命的ですよ。だけど、それでも、我々は何とか一歩でも二歩でも止めるような形の抵抗をしていかないと、本当に靖国の英霊に申し訳ないし、子孫にも申し訳ない。そんな感じが致しました。みんな、笑っているよっていうことでございます。はい。この武見敬三っていう人は、本当に、こういう形で頑張っていますね。このテドロスという人も、はいっていうことであります。今日は、以上です。有難うございました」

一同「有難うございました」

＊＊＊＊＊＊　お　わ　り　＊＊＊＊＊＊